

中国軍將兵と朝鮮戦争

——対米感情・復員・脱走を中心に——

陳 肇 斌

朝鮮戦争の勃発後、中国から海外派兵することになれば、出動する直接の当事者になる中国志願軍將兵が、どのように反応したのか。本稿の目的は復員と脱走を考察することによってその一側面を明らかにする。

志願軍の朝鮮派遣は、時系列に沿って大きく言えば、三回に分かれる。第一陣は主として河南省に駐屯し戦略機動部隊と位置づけられた一三兵团であり、五〇年七月中旬に中朝国境に隣接する地域に集結するよう命令を受け、当初の兵团本体の三八、三九、四〇軍に四二、五〇、六六軍等が加えられ、二六万人ほどの「東北辺境防衛軍」として編成され、一〇月一九日夜から陸續に鴨緑江を渡った。第二陣は本来、台湾攻略の準備にあたっていた第九兵团であり、九月初めに命令を受けて、兵团本体の二〇、二六、二七軍に他軍からの四個師団が編入され、総兵力一五万余人となり、まず山東省に集結し、第一陣が入朝した後に東北地域に移り、一一月に入朝して第二次戦役の東部戦線を担当した。第三陣は、西北地域と西南地域にそれぞれ配置されていた第一九兵团（六三、六四、六五軍）と第三兵团（一一、一五、六〇軍）であり、第二陣の空けた山東地域の集結地と河北省の邢台とに移動し、ソ連から援助された武器装備で訓練を受けながら待機し、翌年四月二二日から始まる第五次戦役に参加すべく、三月頃から

ら順次に入朝した。この後に派遣される部隊には北京・天津地域を衛戍する役割を担った第二〇兵团（六七、六八軍）が含まれ、その他各種の部隊を入れて戦争の全期間に派遣された将兵は、延べ二九〇万人に達した。¹⁾

一、対米感情

朝鮮派兵について、第一陣の第一三兵团の将兵の態度を見てみる。兵团政治部主任の杜平によれば、五〇年八月中旬現在、将兵は「積極的分子」と「中間分子」、「動揺分子」に分類され、それぞれ五〇%、四〇%、一〇%を占めた。「積極的分子」は政権の基盤とする階級の出身者で、政治意識が高く、国共内戦を経験したことから、「戦闘に勇敢であり戦死を恐れず、朝鮮におけるアメリカの犯した暴行に義憤を感じ、朝鮮人民を支援して米軍と戦うことを書面で要求した。」それに次いで「中間分子」は、「討てと命令されれば討つし、討たないとなれば、それでもよい」という態度をとった。残りは精神的に動揺した者で、抗美援朝の「意義を充分に理解せず、平和な生活を恋しがり、苦労や戦争を恐れている。米帝国主義の軍隊と闘うことに不安を感じ、米軍や原爆を恐れた。個別的な事例ではあるが、鴨緑江を跨る鉄橋を「鬼門」と呼び、抗美援朝を「余計なお世話だ」、「火の粉を自ら招く」ものと語った。」その背景には、朝鮮から川一本挟んだ国境扱いに部隊が駐屯していたことから、対岸から「恐米感情」を助長するさまざまな噂、たとえば、「アメリカ軍はとても強く、飛行機や大砲がたくさん装備されており、一発の砲弾で一個中隊がほぼ全滅した」という風聞があったと杜平は指摘した。²⁾

このような将兵態度の分布比率は、杜平によれば、八月中旬頃の調査結果であった。しかし七〇年一〇月一〇日に毛沢東が来訪の金日成に語ったところでは、東北辺境防衛軍の将兵を対象に調査した結果は、二〇、六〇、二〇

の比率であり、しかもそれは将兵に対する思想動員を行った後の数字であった。「思想工作をした後に行われた調査によると、二〇%の将兵は闘う意思をもち、他の二〇%は戦う意思をもたなかった。」会談に出席した周恩来が「それは最初の頃の数字だった」と訂正したことから、同兵团では将兵の参戦意思の向上を図るため、思想工作と調査が繰り返されたように思われる。⁽³⁾

「動揺分子」は、杜平によれば、主として「国民党軍から帰順した兵士、または解放もない地域から新規入隊した一部の若者であった」⁽⁴⁾当時、解放軍の部隊には、日中戦争中の元対日協力軍や国共内戦中の元国民党軍から帰順した将兵が大量に編入されていた。党中央は、四八年九月六日付の劉伯承宛鄧小平電報で語られるように、「兵員を主に敵軍から取ることを強調し、一人も捕虜を無駄にしないよう」各部隊に求めている。⁽⁵⁾翌年七月に周恩来が語ったように、この三年間、「国民党軍は五六九万人を失い、われわれの捕虜となった者は七〇%、すなわち四一五万人に達し、その捕虜のうち二八〇万人が解放軍となった。」解放軍全体に占める比率でみれば、同年四月現在、「部隊によつては、八〇%に達し、少ない場合でも五〇〜六〇%を占め、平均して約六五〜七〇%を占めていた」⁽⁶⁾朝鮮戦争勃発した五〇年六月現在、解放軍の「構成の内訳で言えば、帰順将兵は七〇〜八〇%を占めていた」⁽⁷⁾その後も八月に西南地域において「九〇万人の国民党軍からの帰順将兵を解放軍の部隊に再編する作業が終了した」ことが報告された。⁽⁸⁾

一三兵团の前身が所属した東北民主連合軍に即してみても、内戦当時、大量の帰順兵士を含めた新兵が編入され、「中隊によつては古参と新参の比率は一对三、甚だしい場合は一对四の状況にあった」⁽⁹⁾四八年に長春で包囲された後、解放軍の捕虜となった一〇万人近い国民政府軍のうち、新七軍は日中戦争中にインドで米軍の訓練を受けた元新三八師団に基づいて編成された部隊であり、第六〇軍は後に志願軍の第五〇軍と改編された部隊である。⁽¹⁰⁾また第

九兵团も例外ではなく、たとえば第二六軍八八師団二六二連隊をみても、入朝当初の時点で第五中隊の一三五名の将兵のうち、内戦中の淮海戦役と淞滬戦役で帰順した国民政府軍捕虜出身者はそれぞれ二二、二三名おり、さらに綏遠で改編された董其武兵团の元兵士は三三名おり、合計で中隊の五七・八%を占めた。⁽¹¹⁾

帰順将兵が派兵に消極的であった理由の一つに、親米感情があったと考えられる。朝鮮戦場で国連軍に投降した将兵の書簡からその一端がうかがわれる。たとえば、唐巨昇と史文達、範鵬英、王麓明の四人から国連軍宛の書簡が残っている。国連軍を「同志」と呼称して労をねぎらった同書簡は、次のように述べた。「われわれは、かつて中国国民党の配下であり、四八年一月に東北地域の瀋陽における最後の戦役で、最後まで戦ったが、全体の戦局の關係で不幸にも捕虜となった。今日まで中共匪賊軍の部隊に潜伏し、機会をうかがってきた。今回われわれ四名は、かれらが後退した際に、誘い合い、われわれを助けにくる皆様を待つべく民家に隠れ、すでに一週間余りを過ぎた。匪賊軍がすでに二日前から撤退したため、ここには何ら危険がないことを保証する。ご心配なく前進するよ⁽¹²⁾うに」。

この書簡は決して個別な事例ではなかった。もう一通の書簡も米軍を「同志」と呼びかけた。それによれば、「あなた方は世界平和のため、人類の幸福のために戦っている勇士である。あなたがたは中国の本当の友人で、現在も、将来においても中国と友好関係をもっている。私は、あなた方が中国の独立のためにより大きな力を貢献してくださいと明確に認識している。しかも、わが中国の敵はアメリカ力ではなく、ロシア帝国主義だと認識し、われわれの本当の敵であるロシアと決死の戦いをしなければならないとよく思っています。同時にアメリカ人と戦わないことを誓う。そのため、私はわざわざ敵の占領地域である北朝鮮から国連軍支配下のこちら側にたどり着いたのである。約一ヶ月の時間をかけて東奔西走し、妨害や苦難を乗り越えて山や川を渡り、あらゆる困難を克服

し、本日ようやくわたしの目的を達成できた。」

書簡の主は、北京無血開城の後、解放軍に編入された元捕虜であった。書簡によれば、「私は共産軍の偽の平和の呼びかけに騙され、北平和平の際に共産軍に加わった。しかし一貫して共産軍に屈せず、思想においても政治においても闘争を諦めなかった。共産軍は私を親米だという理由で監視してきたが、ついに私は脱出し、国連軍側に返ることができた。今後、国連軍と力を合わせて仕事をし、われわれの共通の敵を消滅することに加わりたく願っている。すぐにでも仕事をいただき、朝鮮戦場で自己の力を貢献し、わが祖国と国連軍からの期待に応えたいとつよく思っている」⁽¹³⁾

同書簡は、対米協力関係にあったみずからの経歴を述べるべく「遠く四五五年においてすでに国民党の青年軍に参加した」ことに触れたところで物理的に途切れている。⁽¹⁴⁾「青年軍」とは、日中戦争後期にアメリカの軍事援助で訓練される中国駐インド遠征軍の編制に準じ、国民政府の呼びかけに応じて従軍した一〇万人ほどの知識青年が主体となつて四五一年一月から順次に編成された九個師団の部隊であつた。⁽¹⁵⁾書簡の主が捕虜となつた場所をみれば、四八年一〇月に訓練先の台湾高雄から乗船し天津で上陸して北平防衛にあたつたところ包囲された青年軍第二〇五師団に所属していた可能性が高い。

親米感情は、帰順将兵にとどまらなかつた。当時の解放軍将兵の間では、公式に表明された反米イデオロギーが必ずしも十分に浸透しておらず、米英等の西側世界に広く親近感が抱かれていたようである。それは、第三野戦軍の隷下にあつた第三二軍の政治部将校の対米交流行動からもうかがわれる。同政治部は、五〇年五月九日付の同野戦軍政治部の報告によれば、福建省南平市にあつたアメリカ衛理公会系の剣津中学校に進駐した後、部長・課長らをはじめとする延べ二〇名の幹部が、アメリカ人を含む教会関係者と接触した。同部所属の「文芸工作団はさらに

三名のアメリカ人を観劇に通訳付きで招待した。」この接触は、中央軍事委員会から重大な「外交規律」違反として処分を受けた。⁽¹⁶⁾

一三兵团司令官の黄永勝も外交規律に触れた。黄は無断で数名の幹部を連れてイギリスの植民地香港を観光したのである。黄の行為が第四野戦軍首脳部によつて批判され、同兵团が東北に配置換えされる際に黄の対米戦の部隊指揮官としての適性に問題があるとされ、一五兵团司令官の鄧華と交代される理由の一つとなったと言われる。⁽¹⁷⁾

黄らの行為は外部世界への「好奇心」によるものに過ぎないという議論もできよう。しかし、そうとは言い切れない親米感情は軍関係者の間で可視化されない状態で広く存在していたように思われる。当初、志願軍の最高指揮官候補として考えられ、実際、八月の辺境防衛軍の動員大会にも出席していた蕭勁光の例を見ても、その娘、蕭凱は日中戦争中に多くの中共高級幹部の子女と同じく、アメリカ人の寄付で設立された延安「ロサンゼルス託児所」に通い、アメリカ軍機から投下された缶詰を主な栄養源としていた。⁽¹⁸⁾派兵に中国軍将兵が消極的な姿勢を示したのは、杜平の指摘からもうかがわれるが、これまでもつぱら「恐米感情」にその理由を求められてきた。しかしここでは以上見たような将兵の間で広く存在する「親米感情」も大きく作用したことを指摘したい。

二、復員希望（結婚・農地）

五〇年夏、多くの中国軍将兵の関心は、朝鮮戦争よりも平時に戻った現在の生活にあった。三八軍の江擁輝副軍長によれば、「絶対多数の将兵は土地革命戦争と抗日戦争、解放戦争のなかで自己の青春を捧げてきた。いま全国が解放され、戦争も終わり、ある者は部隊にとどまって国防軍の建設に参加することを望み、ある者は地方に復員

することを希望した。家族からの手紙は次から次へと部隊に届き、面会を求める老親や妻子は踵を接するほどであった。かれらは帰郷して結婚して家業に携わり、「一畝の農地と二頭の牛に、嫁、子供と暖かいベッド」という平和な暮らしを望んだ。⁽¹⁹⁾

長い間、中共の軍隊に結婚許可に関する「二八五団」という規定があり、すなわち二八歳以上の年齢で、五年以上の党員歴をもち、連隊（団）長以上の将校であるとの要件を満たさなければならぬ内部規定が存在していた。四九年末に中共中央組織部によって廃止されたとは言え、現実問題として未婚の下級将校や兵士は復員せずに結婚することが困難であり、また従軍前に結婚していた兵士にとつては、一日も早く帰郷して家族との団欒を望んだことを江の記述からうかがわれる。復員は、歳出予算の四〇%を占める同年度の軍事予算を次年度の三〇%に削減するという政府の全体目標に沿ったものでもあり、一三兵团においても、「年齢が大きく体が弱い数多くの将兵を地方に復員する」という計画が七月初旬まで進められた。⁽²¹⁾

復員計画が中止され、東北地域に集結した後も留守家族のことが気がかりであった。それは、八月中旬の「辺境防衛軍」師団長会議以降も進められた思想動員の一環として翟仲禹師団長が行った「目下の情勢と任務」と題する講話からうかがわれる。一九日に行われた三八軍一一四師団の動員大会において翟は、時事学習を始めてから正確な認識を得るようになったが、「まだ反対意見があるようだ。任務を受けてから、戦争には切りがない」と思っている者がいると語り、具体的には、「革命を止めた」と言い出し、「無理難題を持ち出してふて腐れる」ようになったと指摘した。このように派兵に対する将兵の消極的な姿勢に、「留守家族のことが気になっている」ことが背景にあると翟は言及したのである。⁽²²⁾

復員の切望について、後に第三陣に派兵されることになる一九兵团およびその駐屯地である陝西軍区の多くの将

兵も共通していた。五〇年九月と一〇月の二度にわたる新華社陝西支社の報告によれば、復員予定者の間では、復員開始の初期において、「早く家に帰りたい気分が広く蔓延していた。」そのうち、「早く帰郷して苗を鋤いて秋の収穫等を行って家族の農作業を手伝いたい者がいた」⁽²³⁾農家の子弟であった彼らは農事の季節が人を待たないことを強く意識したのである。出征将兵の留守家族の農作業に、村民による代行で支援する制度が採られていたが、実践においては必ずしも十分に行われた状態ではなかったようである。

多くの将兵の出身地であった山東省の耕作代行の状況をみると、五〇年一〇月一七日付の新華社華東總支社の報告によれば、昨年よりよく実施されている今年は、総じて言えば、古い解放区では、留守家族の田畑の一部または大部分は決まった担当者によって耕作が代行されたが、欠点もまた少なからずあった。具体的に言うと、大抵の留守家族は二割の減産となり、一部は五〇六割ほど減産した。原因はいくつかあり、耕作代行が着実に実施されなかったこと、また留守家族に肥料が少なかったこと、代行政策の宣伝が市民に広く深く滲透しなかったことが挙げられた。それに加えて、耕作代行に附随するコストの負担について代行者と留守家族との間で均衡を欠く問題があり、耕作代行の効用自体に影響を与えた。さらに、労働力の配分には合理性を欠き、決算をせずに先延ばしされ、役畜が労働力として計算されず、「耕作代行は損すること」と考えられ、これも耕作代行に悪影響を与える原因の一つであった。⁽²⁴⁾

農事には時季を逸してはいけない性質をもつが、一九兵团の復員担当部門はいたずらに復員作業を遅延させた。各級の復員委員会および事務所は、急いで設置されたため、「極めて不備であり、相互間に協調を欠き、事務手続に時間がかかりすぎた。」復員に向けての集中学習期間が一ヶ月の予定にもかかわらず、その開始を待つには「一ヶ月ないし一カ月半かかった場合もあり、兵士の間で不満感情が高まった」⁽²⁵⁾

一九兵団の兵士の不満の原因は以上のような農事の時季に間に合わないことにとどまらなかった。前述の新華社の報告によれば、復員予定者の「大多数は、上司の翻意を恐れ、みな『長い夜にはみる夢も多い』と語って、軍側を信用していなかった。」そのため、思想が極度に混乱し、苦情が百出した。一部の者は軍および上司を批判し、集中学習を極めて不満に思い、『学習は洗脳だ』と考えていた。」討論や典型的な事例を批判するといった思想工作を受けた後、大抵の兵士は、『納得するようになり、復員後いったん国家の必要によって召集された場合、即時に応召する意思を表明した』と報告された。⁽²⁶⁾ここで注目すべきは、将兵らは上司や軍側を信用しなかったことである。少なくとも旧解放区出身の将兵の場合を見る限り、当初入隊した経緯、すなわち兵隊募集の方法と制度に遡る必要がある。日中戦争の時代から根拠地において、従軍に消極的な農家の子弟を兵士として募集するには、大きな困難が伴った。そこで、青年らの不安を軽減させるために、徐々に誘い込む方法が取られた。たとえば、四三年晋綏辺区の政権側は、農家の徴兵忌避に対処する方法について次のように語った。徴兵忌避による逃亡への対策として、四一年から政治動員の方法を導入し、『壮丁にゲリラへの参加を促し、相当の教育と訓練を経たうえ、正規軍に昇格させる。この方法は直接に軍に入隊させる方法よりも部隊への定着が図れる。最初は地元ゲリラに参加するだけなので、農家にとって比較的に不安感が少なく、壮丁の逃亡の現象は減ったのである。』⁽²⁷⁾四二年の太行区の多くの県では、幹部らは兵士募集が難しいという歴史上の経験から、たとえば「二年で除隊すること、厳しい戦闘には参加しないこと、郷里から遠く離れないこと」等を新規入隊の青年に保証した。⁽²⁸⁾

また晋察冀辺区では、四二年一月に制度として「志願義務兵役制」が導入された。兵役を志願制にすると同時に義務でもあると定められた同制度によれば、将兵は三年間の兵役を服務すれば義務を果たすことになる。当初、徴兵を忌避していた多くの農家の子弟はそれを信じて八路军に入隊したが、四五年夏秋に兵役義務の期間を満了し、

外敵の侵略に抵抗するためという当初の大義も消えた時期になっても、退役は認められなかった。⁽²⁹⁾ 四六年二月にようやく復員した一部の弱兵を除き、多くの兵士は当初の入隊の目的や期間と無関係に、その後、国民政府軍からの進攻に対抗する「自衛」という名目の内戦に動員された。これは服役期間の超過のみならず、抗日戦争に従軍した当初の目的を超えたこととして疑問視されかねない問題であった。四五年秋から翌年の春にかけて元八路軍兵士から大量の脱走者が出たのも、このように権力側がみずから作った兵役制度を順守しなかったことに端を発したと捉えられる。⁽³⁰⁾

四八年九月に華北軍区司令官の聶榮臻が報告したように、「戦争の過酷さと人民の負担の過重、農村労働力の欠乏が原因となつて兵士の逃亡は深刻な状況となつた」⁽³¹⁾ 共産党軍が北京と天津をはじめ華北地域を支配下に収めた四九年三月、逃亡・離隊の事例は一層多発した。とくに一九兵团からの報告では、「軍人の家族が子弟または夫への面会に訪ねてきた事例が多く、将兵の逃亡または休暇申請が多数出たほど部隊に影響を与えた。」事態を深刻に受け止めた共産党華北局は以下の内容を含む五点の注意事項について各地に指示を出した。「脱走または休暇期限を超えても帰営しなかった将兵に働きかけて速やかに帰営させると同時に、その家族が直面している難題の解決に力を貸し、関係者のもっている疑問や不安を払拭し、安心して部隊で服務できるよう環境を整えること。帰営の督促や、その家族の抱えている難題の解決を、各級の党組織の日常業務の一つとして位置づけ、成果を出すよう取り組むべきである」⁽³²⁾

この大量逃亡の発生の背景には、新華社のために毛沢東が四九年の新年の言葉として書いた「革命を最後まで遂行せよ」という呼びかけがあり、すでに支配下に収めた東北と華北地域から年内に江南地域への進軍が宣言された。⁽³³⁾ しかし多くの将兵には、国民党軍からの攻撃に抵抗する「自衛」という従軍当初の目的を達成し自己の義務は果た

したという認識があり、軍から見た「逃亡」とは、兵士みずからの足で発した除役宣言でもあったと言える。朝鮮への出動準備の命令自体が一九兵团に下されたのは一〇月初旬であったが、八月二〇日にはすでに一九兵团を二三兵团の後続部隊として秋の收穫後に山東省と河南省に配置する計画が軍の上層部で秘密裏に進められ、同兵团の将兵は、朝鮮における戦局の展開次第ではみずからの復員予定が突然に中止されかねないと直感的に憂慮したように思われる。現に一三兵团では七月中旬に復員活動が中止され、復員予定の兵士を軍に引き止める方針に転換したのである。

ともあれ、当時の将兵の関心事の一つは結婚問題であった。現に一九兵团の復員予定者は、政治学習において同年五月一日に公布された「中華人民共和国婚姻法」につよい関心を示した。⁽³⁴⁾入隊する前に結婚した配偶者との関係が案じられたからである。同法第十九条には、解放軍の「軍人において本法律の公布から起算して家族と二年間音信関係がなく、その配偶者が離婚を求めた場合、離婚を許可することを得る。本法公布以前にすでに一年以上音信関係がなく、かつ本法公布後に家族との間で一年間音信関係がなく、その配偶者が離婚を提起した場合も、離婚を許可することを得る」と定められる。長い年月にわたって全国各地を転戦し、配偶者と音信を途絶えてきた将兵にとっては一日も遅延なく郷里に復員したかったであろう。他方、配偶者と音信関係があった兵士においては、「その配偶者が離婚を提起した場合、同軍人の同意を得なければならぬ」と同条で定められ、⁽³⁵⁾一見したところ安心してよい立場にいたようである。

しかし、郷里の実情は彼らに安心をもたらすものばかりではなかった。たとえば、復員を受け入れる山東省内の状況に関する華東総支社の五〇年一〇月初旬の報告では、軍人の留守家族の状況が言及された。それによれば、「軍人の留守家族には、誘拐されたり、自ら逃亡したり、婚外異性関係をもったりする現象は広くみられた。軍人

の留守家族の婚外異性関係の相手は大抵、村の幹部や民兵であった。山東省東部の古い解放区では、従軍人口が多く、時期も早かったため、大抵の村はこの問題を抱えている。復員の報が届いて以来、婚外異性関係をもつ軍人家族に自殺や逃亡した事例は数多く発生した。関係の相手である村の幹部や民兵はさまざまな方策を講じて構えている。これには上級幹部も為す術を知らない⁽³⁶⁾」

このような郷里の状況は將兵にも多かれ少なかれ伝わっていた。一三兵团と同じく第四野戦軍の隸下にある砲兵部隊の一例は、それを裏付けている。五〇年六月初めの『東北日報』の報告によれば、東北地域の女性が、新しい婚姻法を誤解し、新たに嫁ぎ先を選んだため、郷里に配偶者を残していた將兵の不安を引起した。「第四野戦軍特種兵の砲兵第一師団第四連隊第一大隊の、東北解放区に本籍を有する將兵の多くは、妻または婚約者から離婚または婚約辞退に関する手紙をもらった。これらの將兵は、日中戦争が終結した八・一五以後に入隊した者で、留守家族と通信関係を保ってきた。投書によれば、郷里の政府当局がこの件を適切に扱わず、現役將兵に多大な不安を与えた。」同新聞の軍人読者からの投書がこの報告記事の情報源であった。

婚姻法に対する誤解の一例として挙げられたのは、遼西省昌北県四区賀家村の婦人会主任の発言であり、婦人大会において「女性は婚外異性関係をもつても干渉してはならない。干渉する人は裁判所に送られる。男性は女性を指一本、触れたら、有期刑三ヶ月になる。ビンタ一回張ったら、有期刑六ヶ月。拳骨で一回殴ったら、無期懲役になる。未亡人は自由意志で家を出る場合は全ての財産を持って行つていい。子供がいれば、養育費を出さないといけない」と語ったとされる。これについて報告の作成者は、婚姻法⁽³⁷⁾の精神である「女性解放、自由恋愛」の趣旨を誤解し、「あきらかに誇張と歪曲がある」とコメントを付したが、婚姻法の公布により、將兵の間で不安を引起し帰郷する願望をいっそう強めたことは間違いない。

復員兵士が去った後の一九兵団の状況については、一〇月二七日の新華社の報告によれば、総じて言えば、部隊は「団結と安定において、これまでなかったほどこい状態に達し、脱走する者の数が相対的に減少し、生産の効率も高まった。」部隊にとどまった将兵は三つに分類される。「積極的な者」は復員に関する中央の決定を強く支持すると表明した。「中間の者」は、「復員させてくれるならすぐ帰るが、させてくれなければもう二年間働いて、遅かれ早かれ自分の番が回ってくるであろう」と考えた。「よくない者」の場合は、復員を強く求め、その希望が叶わなければ不満を表現した。幹部のうち、分隊長以上の「幹部は一律に復員させない」との規定に接して、これまで頑張りすぎて「幹部になったことを後悔する」者もいた。個別の部隊に限ってみれば、復員に関する思想動員を行う際、「将兵に対して平和期の『革命の分業に優劣はない』という趣旨からつよく働きかけなかったため、逃亡する現象が依然として深刻な状況にあり、将兵は精神的に安定しなかった。」復員の希望が認められず部隊にとどまった将兵のうち、逃亡までは踏み切っていないものの、「復員の条件が厳しすぎると不満を漏らしたり」、仮病を使ったり、「ふて腐れたり」、または消極的に自分の番が来るまで待つという姿勢をとったりする者がいた。⁽³⁸⁾

三、復員拒否

1、経済的要因

一三兵団に東北地域への配置換えの命令が伝達される七月中旬まで、復員準備を整えて「帰郷することにわくわくしていた」復員予定者にとっては、急遽、部隊に残留するよう命令が変更され大きな衝撃を受けた。他方、昨日

まで復員を頑として拒否した将兵は軍にとどまれるようになったことで「感涙を流した。」一一三師団の劉某が、その後者の一例であった。三十九年に入隊して以来、一二年ほど中隊の炊事係を担当した劉は、「部隊をみずからの家と見做し」、食事に満足する将兵の顔を見るのが生きがいと感じ、四二歳のこともあつて周囲から「劉おやじ」と親しまれた人物であつた。農家出身で「家族はみな日本軍によつて殺害されたため天涯孤独の身となり」、復員しても帰るところはないというのが、その復員拒否の理由であつた。命令変更後、復員予定者を説得して残留させることが仕事になつた軍側にとつて、復員命令に従わなかつた劉は、一転してみんなの模範となつた。⁽³⁹⁾

復員後の生活への不安から復員を望まなかつた現象は、一九兵団の将兵にもみられた。復員将兵が部隊を去つた後の一〇月末の新華社陝西支社の報告によれば、部隊にとどまつた将兵のうち、復員したら「食いはぐれるのを恐れる」ことから、今度は「自分の番になるのではないか」と不安を抱える者がいて、とくに「部隊に残るには向かない年齢超過者や虚弱体質の者、戦傷による障害をもつ者に多く見られた」⁽⁴⁰⁾

同様の問題は、第九兵団の所属する華東軍区・第三野戦軍の整理復員事業にもみられた。たとえば、「単純に老弱および障害を抱える者を淘汰することを強調し」もっぱらかれらを復員対象とした同野戦軍特殊縦隊の状況は、その一例であり、「今回の整理再編、復員事業を、兵を精強にし行政を簡略に整理するという四二年の事業と同日に論じ、両者の性格上の違いを明確にすることができないゆえ、一部の者の間で困惑し、復員後に路頭に迷うのではないかと不安を引起した。」復員人数が過大ではないかという消極的な意見があり、大陸部における国民党軍の残党に対する掃討や控えている台湾進攻作戦、「帝国主義者もまだ国門の外にいる」状況への対処には大規模な軍事力が必要であることがその理由として挙げられたが、その脳裏を過ぎつたのは日中戦争後の経験、すなわち「四五年頃の復員と同じように、復員した直後にまた自衛戦に呼び戻されるのではないか」との疑念であつた。⁽⁴¹⁾

復員に消極的な兵士が示した不満の一つは、政権のとった旧政権関係者に対する政策との関係であった。復員活動中に、歳出を削減して国家の財政難の問題を克服することが強調されたため、「旧政権の公務員ですらそのまま引き継がれたのに、数名の解放軍兵士だけでそれほど国の負担になるのか」との不満が生じた。都市部の接収にあたり、農村部出身の将兵には不慣れな生産や管理業務を円滑に進めるために旧政権の公務員等の協力が不可欠であることから取られた「留用措置」を指しており、南京・上海・杭州地域の旧政権の留用者数は二四、五万人に上り、その一人当たりの生活費は「四人あまりの解放軍将兵の所用経費に相当し」、巨額な軍事費とともにインフレの原因となっていた。⁽⁴²⁾

復員に消極的な兵士のもつもう一つの不満は、幹部との間の不公平であった。幹部を安心させるべく整理再編を主として兵士を対象にすると強調されたため、兵士の間では、「血を流し命をかけるとき、われわれが最前列にいた。しかし勝利すると、幹部がその果実を享受し、知識分子も重宝される。かれらにはどんな手柄があったのか。こうなると分かっていたら、誰も従軍しなかったのではないか」との不平が生じたのである。実際、かれらの間では「生死をかけた数年間の戦いの末、満身創痍のまま家に帰るのか」との反発が生まれた。余剰人員への説明が不十分なため、「復員対象が決まった後、納得できず大いに落胆し、甚だしい場合はその過程で思いつめて自殺した事例も、個別的是であるが、発生した」⁽⁴³⁾

以上のことから一見して、復員を望まない将兵が多数いたように見受けられる。しかしそれは復員それ自体に反対するよりも、復員後の生活難が考慮されないことに不満が示されたように思われる。実際、軍側から見捨てられたと思わせるようなことは江蘇省と山東省にある一部の部隊で確認される。たとえば、整理される余剰人員の確定が性急かつ軽率に行われ、まだ本人の十分な理解を得られない段階で早々と兵士を本籍に帰らせ、「十分に帰宅で

きる旅費を与えなかったため」、帰郷途中に匪賊と化し、逮捕時はまだ軍の徽章が帽子と軍服に残ったままの状態であったという事例や、物乞いを生業とした事例もあった。⁽⁴⁴⁾

帰郷の旅費を十分にもらったとしても、帰郷後の生活、すなわち農地が分けてもらえるかどうかという不安があった。それは、六月三〇日に公布された『中華人民共和国土地改革法』が一九兵团の復員予定者にとって婚姻法と同様に政治学習時の最大の関心対象の一つとなったことからうかがわれる。⁽⁴⁵⁾ 同法第一三条第三項では、復員した革命軍人は他の住民と同じく農地および生産資料を分け与えられ、第四条では、行方が確認できない元住民用の農地を確保しておくべきと定められるが、しかしたとえば、山東省の現状からうかがわれるように、必ずしも守られず、復員将兵の住居と農業生産に問題が存在した。というのも、古い解放区では土地改革が行われた際、「入隊時に独り者で留守家族がいない者や元対日協力軍、元国民党軍の将兵、打倒して追放された地主や富農については土地と家屋を留保しなかったからである。このことの対応に村の幹部は困難を感じた」⁽⁴⁶⁾。

こうした問題は古い解放区に限らず、周恩来も指摘したように、全国大に存在していた。周は帰順兵士の多くは「新解放区出身であり、国民党に強制的に兵隊にとられたため、本籍では彼らの生存について確認できなかった。現段階で復員しても仮に地元ですでに土地改革が終了していれば、土地を分けてもらえないこともある」と、五〇年六月二四日の政務委員会で語った。⁽⁴⁸⁾ 過密な人口に比して農地資源が貴重であったため、志願軍兵士のうち朝鮮に渡った後も、留守家族として「政府から優遇される」立場にいながら、土地改革で「軍籍証明書」がないことを理由に兵士本人分の田畑が分配されなかったとの書簡を郷里の父親から受け取った者がいたくらいである。⁽⁴⁹⁾ 帰郷後の農地の有無への不安も、少なくとも一部の帰順将兵にとっては、復員よりも軍にとどまることを希望した理由の一つであったように思われる。

ここで、具体的に数名の将兵に即して実情を見てみよう。まず、一九兵団の復員と残留の渦中にいた六五軍一九五師団五八三連隊の下級文化将校、謝超群の事例である。謝は、郷里での生活難が骨身に徹して知悉した人間であった。幼少の頃に父親を亡くした後、安徽省含山県城で豆腐屋を営む叔父の養子となり、その援助を受けてようやく小学校を卒業したうえさらに一、二年私塾に通った程度の教育を受けたが、一八歳にあたる三八年四月に日本軍の侵攻で豆腐屋が焼かれ、国民政府側のゲリラ部隊に加わった。日中戦争後、帰郷したが、四八年六月に郷里で国民政府軍が壮丁を募集していたところ、「一〇石の米を実家に入れる」ことを条件に従軍した。九月から北平補充兵訓練連隊で新兵の訓練を受け、二ヶ月後に傳作義配下の国民党一六軍に一兵士として配属された。翌年の一月に北平無血開城の結果、一六軍が解放軍の独立三一師団に改編され、謝も同師団第二連隊第六中隊の一員として二月に副分隊長、三月には文書係を務めた。五月に連隊第二機銃砲中隊の文書係に異動し、さらに連隊宣伝隊の宣伝員を経て、五〇年四月に第三機銃中隊の文化教員、朝鮮に派遣される直前にあたる翌年の二月に三二歳で師団文化工作隊の組長、五二年一月には第二大隊第六中隊の文化教員などを歴任した。⁽⁵⁰⁾

謝のようにいわば家族の生きる糧のために自己を「壮丁」として軍に売った事例が国民政府期のことであったとすれば、新政権成立後も将兵の留守家族の生活は俄かには変わらなかった。「依全」という名前の志願軍兵士が父母からもらった五一年の旧正月を三週間後に控える一月一六日付の書簡から、その一端がうかがわれる。「現在、一家の生活は非常に苦しく、毎日落花生を炒って売っている。弟妹たちも幼すぎて労働力にならない。父母の働きだけで一家八人の生計を立てている。足りない分は政府から少し支援を受けているが、ようやく飢えを凌げる程度に暮らしている。写真を送ってほしいとお前は言うが、写真を撮る余裕まではない。意に添えず心苦しいが、この手紙で我慢してくれ。」便箋の上部余白には、前年の旧暦一二月と四月の来簡に今回のを加えて計三通、受け取っ

たが、父親から出した計四通の書簡のうち何通落手したのかと確かめた文言が書き加えられている。なお、一家の長男も従軍した⁽⁵¹⁾が、貧困農家の口減らしの一環であったように思われる。

さらに兵士とその家族の生活の一端をうかがわせるものとして、二六軍七八師団二三三連隊第八中隊の兵士の実家宛の送金記録が残っている。五一年七月一八日付の記録で派兵を控える五〇年夏秋現在の状況と一年弱の差はあるが、六名の兵士の出身地が広く各地に分布していることから、一定の代表性をもつ資料にはなる。まず、華北の山東省出身の石寿高が、郷里の高密県下区徐木庄郷于家宮村の石寿徳宛に、同じく山東省出身の楊万勝が、郷里の新太県高平区高泉村の楊其良宛に、それぞれ一〇万元を送金した。次に、華中の河南省出身の魯相林が、郷里の洧川県朱街郷小寨村の魯金来宛に、同じく河南省出身の張書敬が、郷里の尉氏県蔡庄郷凹庄村の張臣義宛に、それぞれ二〇万元と一五万元を送金した。また同省出身の牛清山が、郷里である曲庄牛集村の牛心志宛に、二五万元を送金した。さらに華南の福建省出身の黄後が、郷里の南安县洪瀨鎮仁宅郷竹林関村の黄塔宛に、二五万元を送金した。以上の楊と張が副分隊長以外は、全員一般兵士であった⁽⁵²⁾。兵士と分隊長の月当たりの所定手当額がそれぞれ四万一千元と四万五千元であったことから、いくら努力したとしても一回一〇〜二五元を送金するには、三ヶ月から半年近くの儉約が必要であつたろう。ちなみに、第三野戦軍が上海で発注した軍用の編上靴の値段は一足あたり九万元であつた⁽⁵⁴⁾。

なお、農地を含む生活の問題にとどまらず、帰順した元対日協力軍や元国民党軍の将兵の一部は帰郷後に直面しなければならぬ地元住民との関係に不安を抱えていた。かつて異なる勢力に分かれて死闘したため生じた対立感情が地元根強く残っていたからである。このことは、一〇月初めの山東省に関する新華社華東總支社の報告で指摘されたところからうかがわれる。報告によれば、元対日協力軍や国民党軍から帰順した将兵の復員に市民が反対

した。日中戦争や国共内戦時に彼我の相互間に厳しく敵対した地域では、復員してくる帰順将兵に対する敵討ちを市民は考えた。ある市民は、「かれには功績もなく、どのように罪を償ったのか。政府はかれを赦したかもしれないが、われわれ市民は下手人を赦すわけには行かない」と語った。⁽⁵⁵⁾戦争の傷跡は、戦闘行為それ自体が終結した後、癒されるにはなお相当の月日が必要されるほど深かったのである。

以上のように、市民生活の困窮状況や軍事部門への傾斜的資源配分、戦中の被害住民との対立関係への不安等を併せて考えれば、部隊への残留を将兵が熱望したという安易な結論を導き出すことはできず、志願軍という名目の下に実質上の「経済的徴兵制」がとられたという実態は見えてくるのである。

2、適応困難

三八軍のすでに復員した将兵の一部は、江擁輝の書いたところによれば、積極的に原隊への復帰を求めた。挙げられた事例の一つは、一一四師団三四二連隊の元第一大隊長を務めた曹玉海のことである。曹は山東省莒南県の野菜栽培農家の出身で、六歳のころ「凶作のゆえ小作料を納められなかった父親が地主によって撲殺され」、九才に地主の家の牛飼いとなった。祖父は「日本軍の掃討作戦に遭い銃剣で殺害され」、その後、祖母、母親も病死したため、従軍した。部隊が湖北省宜昌で渡江作戦をした際に負傷して武昌の病院に入院した。治癒した後、現地で復員して武昌監獄の長に就任したが、部隊が武昌を経由して東北に赴くのを聞知して原隊に復帰することを申し出て許可された。安定した平和な生活を放棄し、しかも看護師の婚約者を残してまで原隊復帰を望んだとしてその「自己犠牲」の精神が称えられ、その行為の理由については「革命の大義のため」とともに「自分は銃で身を立てた者

で、……地方での仕事は面白くないから」と曹が語ったと記される⁽⁵⁶⁾。

曹の語った原隊復帰希望の後者の理由は、復員軍人の志向を観察するにあたって注目に値する。当時の武漢には五つの監獄があり、そのうちの武昌監獄の前身は、国民政府の湖北第一監獄を受継いだものであり、清の末期に張之洞のイニシアティブで日本の巢鴨監獄をモデルに設置された中国最初の近代監獄、湖北省城模範監獄に濫觴が求められ、日中戦争後に一時、一三〇〇人が収監された規模の施設であった。革命後に旧政権の監獄の管理方法がそのまま引き受けられたわけではないが、中共中央社会部作成の「監獄管理」規則をみれば、管理は収監者に対する「感化教育の方針に従って、授業、新聞の閲読、討論と反省」等の方法を通じて行われるべきで、看守は収監者の言論や思想動向を把握しそれを「書面資料に作成し」毎日報告書を上級機関に提出しなければならぬと定められている。この規則は四八年に公布され、五四年に武漢の位置する中南地域の司法機関の執務用学習資料に収録された⁽⁵⁷⁾ことから、五〇年夏も実際に機能していた規定であったように思われる。監獄の最高責任者として制度や書類等に囲まれた管理中心の生活は、戦争の技能のみで評価されてきた古参幹部にとって、「面白くない」と感じたのも無理はなく、負担とすら感じられたのではなからうか。

一市民となって都市部の社会生活に適應することに困難を感じた復員者は、曹だけではなかった。同年の夏ころ武漢を含む湖北省の銀行関係の幹部を例にみると、「省総支店管轄下の各支店のうち、大部分の支店長は初步的な読み書き程度の水準にとどまり、部隊から復員したばかりで、銀行業務を理解できない。会議には興味を示さず、討論の時間になると居眠りに陥りやすい。」ある県の銀行支店長は党に対し、みずからの軍歴が長いことを理由に「生活待遇の向上」や「結婚活動への支援」に加えて、銀行から他業種への「転職」という三つの要望を党に提起した。広東省広州市の銀行幹部のうち、出張所長、支店長や課長、係長には、曹のように南下した部隊から復員し

た四六名の古参幹部のうち、日中戦争期と国共内戦期からの幹部はそれぞれ一五名と三名が含まれた。「古参幹部のうち銀行業務に携わった経験のある者は、わずか二名のみであった。」類似した現象は、中南地域全体で共通したことであった。六省（河南・湖北・湖南・江西・広東・広西）二市（武漢・広州）一島（海南島）を範囲とした同地域の支店と事務所は、ほとんど留用人員や学生からなる新幹部で占められ、政治的に重宝される「古参幹部のうち兼職する者が多く、しかも専門的技能の水準が低い」と報告された。⁵⁸⁾

このように復員したにもかかわらず社会復帰に困難が感じられた状況のなかで、戦争状態を積極的に受け止めた古参幹部が少なからずいたことは、事実であった。戦争を歓迎するかのような議論は、とりわけ都市部では広く観測された。北京、天津、上海、漢口等大都市の「一部の幹部は、いい調子になって来たぞ。開戦となったら、異動ができて、部隊に戻るぞ」と語った。⁵⁹⁾漢口、大冶地域の部隊に残った幹部の場合も、「また俺らの時代がやってきた」と喜んだ。しかしそれは自身が直ちに前線に赴くことを希望したということにはならない。彼らは開戦をみずからの存在価値を証明する機会として歓迎したこの発言の後に、「俺は八年も戦ってきた。また戦う時が来た。そろそろ他の人の番になるのだ」と続けた。革命後、自分たちよりも建設に必要とされる知識をもつ者が重用される時代への不満が表現されたのである。同地の軍人幹部のもう一つの発言もそれを裏付けている。それによれば、「いま知識分子が重用されるから、かれらに前線に行かせて戦わせればいい。かれらでは役に立たないと分ってから、俺らが行けばいい」と語られたのである。⁶⁰⁾

大都市に限らず、江蘇省の無錫、蘇州、常州、丹徒等各地の中小都市においても、一月四日付の『蘇南日報』の報告によれば、古参幹部のうち、「警戒感と緊張感が欠けている者が少数ながらいる」一方、「戦ってもいい。新幹部にとって一つの試験になる。ゲリラ戦になれば、お前らの『給与制』どころではなくなるぞ」と語って、四九

年の政権成立後に革命に加わった新幹部をからかった者がいた。新幹部は主にある程度の教育を受けたことがあって都市部の生産と管理等に要する知識をもつ人材が中心であり、かれらの収入は、読み書きができない農村部出身の古参幹部の受けていた生活必需品を現物で支給する「供給制」と異なり、「給与制」で現金が支給された。制度として集団生活に適した前者よりも、個人の自由が多く許される後者の方が、一般に言えば、待遇が手厚いと認識されていたため、古参幹部の不満は鬱積していた。そのことから、「ゲリラ戦となれば、新幹部の大半は離脱するであろうことから、頼りになるのは、やはり俺ら田舎者だ。いま指導部はわれわれを見下しているが、そのうち値打ちが分かるよ」と語った者がいた。実際、新幹部のうち、「非常に勇敢な態度を示した青年団員もいて、万が一戦争となったら、銃をとって前線に行く」と語った者がいたが、他方、時局につよい不安を抱き、精神に大きく動揺を来たし、「朝鮮人民の勝利には懷疑的であり」、非常な恐れを為した者もいた。勤務意欲が低下し、甚だしい場合はサボタージュをした者がおり、「給与制」の幹部は戦争の勃発によつて職を失うことを恐れた、と報告された。⁽⁶¹⁾このような新幹部をみて、古参幹部は不満を一層強めたであろう。

新幹部との不和から戦争状態を望む古参幹部は、内陸部においても同様であった。チャハル省では、古参幹部は、華北総支社の一二月一五日付の報告によれば、「総じて言えば、戦争を恐れず、勝利に自信をもっており、派兵して朝鮮人民と肩を並べて戦って、祖国の安全と世界平和を守ることを主張し」、教育水準の低い農家出身の幹部には、「新しい業務（建設関係の仕事）は身についていない間、古い業務（ゲリラ戦）はまた使えるようになった」と得意げに語り、「俺たちは『平和的建設には向いていない』が、『ドンパチには得意だ』と考える者がいて、新幹部ら知識分子には負けまいと意気込んでいた。」実際、懷仁城関区の区長は従来、退職する意志が強かったが、戦争を含む情勢報告を聞いて以降は、「もてる時代が来た」と思うようになり、退職のことを口にしなくなった。⁽⁶²⁾

新疆迪化^{ウルムチ}に駐屯していた部隊や老幹部も例外ではなかった。かれらは、抗美援朝運動には「強い戦闘的意欲を示し」、「アメリカ式の装備で武装された蒋介石軍を打ち倒したのだから、恐れることはなにもない」と語り、「アメリカ帝国主義を徹底的に打ち倒すのを要求し、毛主席朱德總司令官の命令一つで、どこにでも戦いに行く」と強気であった。しかしかれらをそうさせたのは、新華社西北總支社の報告によれば、「思想上、盲目的に樂觀し、東西兩陣營の実力対比に関する国際社会の知識が極めて欠落している」からであった。また、遠隔地の新疆に駐屯した部隊に特有の問題もあった。つまり「一部の者は新疆勤務を嫌って、軍の出動を機会に新疆から離れるとの考えからそれを求めた」ということであつた。⁽⁶³⁾

むろん、市民社会に馴染めないからと言って、古参幹部がみんな自己の生命を顧みず原隊復帰を申し出たわけではなかった。実際、同じ漢口、大冶地域の古参幹部をみると、「一般に言えば、時局に無関心で、天が落ちたとしてもそれを支えるのは毛主席だ」と思っていた。鄂城県委員会の秘書李延斗は、戦争が勃発したら嫁がもらえなくなるのを恐れ、志願軍が朝鮮に派遣されたのを聞いてすぐ結婚活動に奔走しはじめた。復員した幹部のうち、厭戦感情をもつ者が一部いて、誰が何と言おうと、もう軍には戻らない。命を革めるはずが、嫁と子供のことを考える時間も革められた。未だに嫁をもらえていない」と語った。⁽⁶⁴⁾ また漢口には、「漢口に來た時、上司から今後は平和的建設に入るため、長期的なプランを持たないといけないと言われた。なのに、また戦争かよ。残念だ！」と語った幹部や、「これ以上戦わないに越したことはない。生まれたときから今日まで戦争続きで、いつになったら終わりが見えるのか」と語った幹部がいた。⁽⁶⁵⁾ チャハルにおいても、「今の生活に満足し、緊張した情勢をみて戦争となるのを危惧し、苦勞を恐れ、困難を恐れる幹部も少数ならいた。」と報告され、新疆迪化^{ウルムチ}からも「個別の古参幹部や古参兵は厭戦感情があり、中国の平和的建設が始まったばかりで、いまの参戦は時期尚早だ」と語った。

帰順した将兵および実戦経験の少ない者には不安と恐怖感を抱き、対米戦争で本当に勝てるのかと疑っていた。少数の者にはアメリカと蒋介石にまだ未練をもち、政権交代の考えが残っている⁽⁶⁷⁾と報告された。

四、脱走

第九兵团の三つの軍は、第二次戦役後の東部戦線を担当し、一月二七日から二月二四日にかけて、北朝鮮の北東部に位置する長津湖で展開した。同兵团の脱走将兵に対する処分決定や判決資料の一部が残っており、これに基づいて戦場における志願軍将兵の状況を考察する。

1、二七軍団

二七軍が担当したのは、長津湖の東西両側から北上する米軍を迎え撃つことであり、東側に八〇、八一師団が配置された。八一師団では鴨緑江をわたる五〇年一月中旬から、落伍と脱走の事案が確認される。同師団の文化工作隊に所属する二三歳の朱超男がその一人であった。朱は、山東省徐州市邳県の商家の生まれで、四九年五月に上海攻防戦の際に国民政府軍から帰順した。鴨緑江畔にある吉林省臨江県から出発した一二日当夜に落伍し、翌日に本隊に追いついたが、翌晩またもや落伍して泊まって動かなかった。六日目に、朝鮮人民軍の自動車に搭乗して東興に宿泊したが、同村に対する敵機の空襲をみて、山間部に移って戦争終結までそこに住み着こうと考えた。しかし四、五日ほど宿泊した後、臨江に引き返そうとして歩き出した。道中に歩いては泊まり、二〇数日後に臨江の留

守処に戻った。原隊に復帰するよう再び動員されたが、臨江から前線に赴く一路に始終に苦情が多く、「政治指導員を銃殺すべき」と公言して」上司に反抗したとして、五一年二月二十八日から三ヶ月間の「労役」との判決を同師団の軍法処から言い渡された。⁽⁶⁸⁾

次に八〇師団所屬の下級將校、万勝林・捕虜管理分隊の副中隊長の脱走事案をしてみる。二五才の万は江蘇省沐陽県の貧農家庭の生まれで、日中戦争中の四四年八月に入隊し、翌年八月に入党した。兵士から通信員、通信班長、正副小隊長を経て、副中隊長となった。軍党委員会・紀律検査委員会の行った五一年三月二日付の処分によれば、前年十一月に朝鮮に入った当初、「すでに脱走の考えを抱き、同中隊の副政治指導員にそれを打ち明けたことがあった」が、成功しなかった。新興里における戦闘が終了した後、「敵による空襲の脅威と環境の厳しさから動揺し」、通信員ら兵隊を引き連れて脱走し、臨江の留守処に帰った。そこで拘束されて前線に送還された。万は党籍剥奪および軍法部への送致という処分を受けた。⁽⁶⁹⁾

万は脱走する途中に、以前二七〇連隊野砲中隊副中隊長を務めていた頃の知人、陳兆明に邂逅した。二二才の陳は同師団野砲連隊第二大隊九二ミリ歩兵砲中隊の小隊長で、同じ沐陽県（の中農家庭）出身でもあった。日中戦争終結後の四六年六月に入隊し、通信員、兵士から、正副分隊長を経て、正副小隊長を務めた。四七年一〇月に入党し、党内においては支部委員を務めた。新興里の戦闘が終了した後、陳は連隊の朱參謀の指示を受けて傷病者を引率して新興里に向い、新興里大橋に到着した頃すでに夜が明けた。傷病者を橋下の空地に休憩させ、みずから一名の兵士を連れて朱參謀を探しに行き、その途中に万勝林に遇った。陳は、処分決定書によれば、「傷病者を放置して」万とともに宿泊し、そもそも思想上、「右傾的であり、命が助かりたい思いが強かったことから、政治上、動揺しはじめ」、万から「戦争は残酷なものだ。逃げよう。このままでは、もたない」と持ちかけられ、脱走を決意

した。戦争から離脱するため、「自傷」の方法を提案した」が、自傷では検査によって露見しかねないという万の意見を聞き入れて実行には移さなかった。その後、万らと相談して武器を携行して五人のグループで脱走した。臨江に帰ったが、現地で捕らえられて原隊に送還された。脱走の途中、「捕まって原隊に送り返されたら、また戦場で機会を見計らって自傷しよう」と陳が語ったことから、「どうしても戦争から離脱したい強い意思」が、うかがわれる。⁽⁷⁾

この新興里戦闘において惨烈を極めた近代的戦争を初めて目撃した衝撃から、退却を図った者のうち、もう一人の中隊長級將校、韓啓がいた。八〇師団砲兵連隊の後方支援を担当した二五才の韓は、江蘇省灌雲県の中農家庭の出身で、日中戦争中の四四年七月に入隊した。内戦中の四八年六月に入隊し、部隊の会計、監査係を担当した。同師団の処分決定書によれば、「本人の右傾保守の思想により以下のような重大な不祥事を起こした。」つまり、新興里戦闘後、部隊が引き続き前進し、その後方支援を担当した部門は韓ら二名の引率で原隊に復帰するよう命令を受けたが、途中で先頭部隊と連絡を失い、新興里付近に宿泊した。その間、韓は糧秣員と通信員を一名ずつ連れて部隊との連絡をとるべく前進した。途中で敵機による空爆に遭ったため、「恐れを為して前進せず」、糧秣員一人のみを進めさせ、みずからが通信員を連れて連隊の後方支援部門の宿泊地に引き返した。「師団後方支援部の駐屯地に敵機が少ないと思った」韓は翌日、糧秣員と通訳を一名ずつ連れて無断で連隊後方支援部門を去り、師団の後方支援部を探した。着いてみると、師団後方支援部はすでに他所に移った。同地にいた二六軍の砲兵連隊から、「二七軍は休息すべくすでに後方に撤退した」と聞かされた。「右傾思想があった」韓は、同行の六三名の部下を連れて後方向に進み、三舗里に至っても部隊に追いつかなかった。この時、韓の思想はますます「萎縮し、艱難困苦を恐れ」、臨江にいったん帰ることを言い出した。ついに朝鮮通貨二二万五千七百元、食糧券三千一五〇キロ、秣券三

千二〇〇キロを持って、通訳とともに、許可を得ずに臨江に帰って行った。以上のことから、韓は免職処分を受けた。⁽⁷¹⁾

脱走事案は、長津湖の西側にある柳潭里の戦闘を担当した二七軍指揮下の九四師団からも発生した。二八〇連隊第二大隊機銃中隊の黄鑑堂が、その一人であった。二六歳の黄は、山東省萊陽県の貧農家庭の生まれで、日中戦争終結後の四六年一月に入隊し、同年末に入党した。兵士から正副分隊長を経て副小隊長になった。柳潭里の戦闘後の一二月四日、所属部隊が徳洞山に向って進撃したが、処分決定書によれば、黄は「命を惜しむ右傾的な思想に支配されて」戦闘を回避すべく食糧袋を取りに出発地に戻ることを理由に中隊長に許可を求めた。それが認められず、兵士一名を誘って脱走し、臨江に至った。同地で収容された後、原隊に送還された。謹慎期間中に、同じく脱走したもう一名の副小隊長に働きかけ、歩哨から銃を奪って再度の脱走を企図したが果たせなかった。⁽⁷²⁾

同連隊第三中隊の文化幹事の王公堂も、脱走したため党籍を剥奪され、軍法機関に送致された。一二才の王は、山東省平東県の中農家庭の生まれで、内戦中の四七年四月に地元の政府機関から入隊した。兵士から文書係、文化教員、書記、文化幹事を歴任した。入党したのは入隊前の四六年一月であった。処分決定書によれば、王は柳潭里の戦闘が終了した後、「艱難困苦の環境に直面したため、精神に動揺をきたし」、通信員に対して「寒すぎて、もない」と語った。通信員から「逃げようか」ともちかけられ、一緒に脱走した。吉林省輯安までいったん帰ったが、国内各地の取締り措置が厳密であったため逃げ切れないことを悟り、当局に自首せざるを得なかった。しかしそれは心から「改悛したのではなく」、原隊に送り返される途中、同連隊の脱走したある副小隊長から誘われ、もう一名を加えて三人で逃走した。結局、前回と同じく逃げ切れないことを悟って再び自首し、原隊に送還された。王の脱走は個人の欲望を極限にまで追求する「ブチブルの思想によるもの」と断罪された。⁽⁷³⁾

同連隊第四中隊の王鳳彩も、党籍剥奪と軍法機関送置との処分を受けあった。二三歳の王は、山東省萊陽県の貧農家庭の生まれで、四六年一月に入隊し、一二月に入党した。兵士から正副分隊長を経て副小隊長を務めた。処分決定書によれば、王は行軍途中の一二月二八日に、落伍した兵士を探しに行くことを理由に部隊から離れた。兵士一名を連れて銃を携帯したまま、臨江まで脱走したが、「逃げ切れないことを悟って、やむを得ず落伍したと称し」、師団の留守処に辿り着いた。師団から原隊に帰るよう促されたが、それに従う意思をもたず、一二月一日の夜に再び逃走した。臨江の北西約七・五キロ離れたところで民兵に捕らえられ、原隊に送還された。処分決定書において、「艱難困苦で緊張した戦争の環境のなか、個人の安逸と戦闘からの離脱、自己保全を図り、政治的に動揺した」として糾弾された。⁽⁷⁴⁾

さらに同師団二八二連隊の衛生隊の羅福成も、脱走したため党籍剥奪と軍法機関送致との処分を受けた。二三歳の見習い医務員の羅は、山東省蓬萊県の中農家庭の生まれで、日中戦争末期の四五年一月に入隊し、四七年九月に入党した。看護師から衛生員、正副衛生分隊長を歴任した。羅は鴨緑江をわたって以来、「艱難困苦の状況下にあつて何度も脱走を考え」、ついに行軍中の二二月四日の夜半に、見習い医務員と衛生分隊長、衛生員それぞれ一名を誘い、体温計と聴診器を一丁ずつと衛生隊の証明書を二枚もって脱走した。「臨江と通化に至る通行証明書を偽造し、通化や瀋陽に行つて四人で小さな薬局を開こうと計画した」が、臨江で民兵に捕らえられ原隊に送還された。⁽⁷⁵⁾

同連隊の輪番訓練隊の姜忠海隊員も、脱走事案の一つとして処分を受けた。三七歳の姜は、山東省福山県の貧農家庭の生まれで、四七年一月に入隊し、二年後に入党した。兵士から正副分隊長を経て、副小隊長を務めた。処分決定書によれば、姜は入朝後、「艱難困苦の環境と敵機の脅威に直面し」、動揺して脱走することを考えた。一二月一〇日に分隊長クラスの幹部二名に働きかけ、脱走時の集合場所を申し合わせた。同夜に実行に移し、分隊長には

小便に行く伝え、予定の地点に合流した後、三人で脱走した。途中、「部隊に見つかっても、引き続き方法を考案して逃げるべく」、予備の集合地点までも申し合わせた。三浦里で軍の検査に遭って、いったん収容されたが、隙を見て三人で脱出した。当夜、再び検査に遭い収容されたにもかかわらず、「改悛の意思がなく、機会をうかがって三度目に逃げた。」民家に入って私服に着替えて逃走を続けた。帰国してどこかで職を探し、一、二年働いた後、帰郷するつもりであったが、派出所員による戸籍の訪問検査で発覚し、原隊に送還された。姜は「右傾的で、命が助かりたい思想が強かった」と処分決定書において糾弾された。⁽⁷⁶⁾

2、脱走の背景

前述のそれぞれの脱走について、処分された側が語る資料がないため、処分した側の挙げた事由に基本的に依拠せざるを得なかった。しかし作戦行動をとにした中隊や師団規模で同人の置かれた環境をみれば、その行動の意図をより深く理解することができよう。ちょうど八〇師団政治部の作成した五一年三月一日付で作成された『入朝作戦時の政治工作に関する総括』と題する報告書が残っており、それに記載される資料を使って考察を試みたい。

まず、第二次戦役終了後の将兵の精神状態である。報告書によれば、「今回の入朝作戦は、空前の困苦艱難に直面し、死傷者数が多く、戦争環境が残酷であった。新興里戦闘が実施される過程および実施後において、幹部から兵士に至るまで、思想が混乱し、右傾的で命を惜しみ、萎縮して前進せず、戦場から逃走し、軽傷だけで陣地を下り、ひいては個別的事例ではあるが、捕虜となつて情報を漏らすといったような現象まで、間断なく起き続けた。大抵の将兵は帰国して休養をとつて装備を補充することを求め、再戦を欲せず、または再戦しても自信がなく、た

だ待つという消極的な態度をとり、他の部隊との交替や装備の機械化に幻想を抱いた。⁽⁷⁾

部隊は休息を取りながら、将兵に対して「説明や動員、査定、奨励懲罰、教育等を通じて」くり返し思想工作を行い、朝鮮戦争に関する「正しい認識」を回復することができたが、「それにもかかわらず、一部の同志には戦争の残酷さを反芻したため、右傾的で墮落し、個人の利益と全体の利益との矛盾を正しく処理できず、自傷自殺し、動揺して逃亡……するようなことは、個別的事案ではありながら、後を絶たない。左記の数字がそれを裏付けている。」つまり、兵士から中隊長級将校までを含めて、「逃亡」九五名、「自傷」二名、「自殺」四名、「陣地離脱」三名あつた。⁽⁷⁸⁾

八〇師団では、通常の「脱走」に計上されない、形を変えた脱走行為が落伍者の行動から観測される。報告書によれば、今回の入朝作戦において、師団全体の非戦闘による減員は二〇〇〇名に達し、減員全体の半分を占め、八〇師団の史上空前の規模であり、「驚くべき数字であつた。」それには、出動の準備時間が短いこと、天気が寒いこと、物資的な準備が十分ではなかつたという客観的な理由に加えて、指導上において経験がなく認識不足のため対策を十分にとれなかつたという主観的な理由による減員があつた。「それ以外に、落伍した者自身に深く追及しなければならぬ問題もある。健康上の理由で落伍を避けられなかつた一部の者、なかんずく古参者の場合を除き、戦闘を離脱するという右傾的な思想をもつがゆえにその行動をとつた者も少なからずいた。そのような者には、とりわけ元董其武兵团から編入された帰順兵士や一部の古参者が見られた。今回は外国で行われた作戦のため脱走が難しいことから、途中で落伍する行為は、かつての国内における作戦時の脱走に相当する行為と言える。現在に至っても、少数の一部の者の脳裏には、台湾進攻作戦であれば乗船した状態で闘わなければならないが、陸上の朝鮮では落伍する方法があることから、台湾進攻よりは朝鮮派兵の方がいいと認識されている。したがって、行軍にお

いて落伍し、戦闘終了後に追いつけばいい料簡で、最大でも批判や警告処分を受ける程度にとどまり、⁷⁹「べっちゃらだ」と高をくくっている。そのため、これらの者は、この間の大量減員の状況のなかで、思うままに落伍し、行軍の位置から離脱しても報告しなかった。」

将兵らにとって、朝鮮で実際に遭遇した近代的装備をもつ米軍の戦闘力と、それまで軍から教えられたこととは大きく異なるものであった。朝鮮に渡る前、将兵に対する軍側のキャンペインは「米帝を見下す教育」に重点が置かれ、アメリカ軍は「見かけ倒れ」で「張子の虎」でしかないと強調され、戦略的観点から「張子の虎」と位置づけていたアメリカをさらに一歩進んで「死んだ虎」と表現された。ちょうど北朝鮮軍の連戦連勝した時期と相俟って、「将兵には盲目的に敵を軽視する思想が生じ、アメリカの力を低く評価しすぎた。その後、仁川上陸作戦が起き、朝鮮の戦局が悪化したのをみた将兵は、一転して「悲観し始め、今度はアメリカの力を過度に高く評価し始めた。抗美援朝の出動任務を与えられた後、近代的なアメリカ軍を相手にすることが初めてであり、その特徴が分かつた。抗米援朝の出動任務を与えられた後、近代的なアメリカ軍を相手にすることが初めてであり、その特徴が分かつた。経験も乏しく、飛行機からの脅威も大きいことから、将兵の間では恐米感情が広く観測された。」⁸⁰

しかし、第一三兵団による西部戦線から第一次戦役の勝利の報が伝わつてくると、状況は一変した。この勝報に加えて、軍側の「動員工作では、意欲と自信の向上を図るべく、敵軍が近接戦や夜戦、手榴弾を恐れることを盲目的かつ一方的に強調され、部隊によつては敵が近接戦を恐れることについて、接近されると即座に降参する」と解釈された場合もあった。将兵の自信が高まったことにはつながったが、敵を軽視する種が撒かれたことになり、⁸¹「携帯食を一袋も使い切らないうちに朝鮮全土を解放することができ、数日で米軍を半島から追い出せる。俺が行けば、一人で二人分の仕事をしてやる、朝鮮の次は日本だ」とまで言い出された。」したがって、新興里戦闘の際、上から下まで盲目的に敵を軽視するような事態を招いたのである。問題点を予想しなかったため、敵情の判

断から兵力の配置使用、戦術上の指揮に至るまで、全ての点においてミスが発生した。一夜で戦闘を終結することを機械的に思い込んだが、実際は一夜で解決できず膠着し、多数の死傷を招いた。「その後、自信をなくし、恐怖心も高まり、甚だしい場合は、勝利のことを語っても信じてもらえなくなった。⁽⁸¹⁾」

一般に言えば、将兵の士気は、勝ち戦と負け戦とは全く正反対の形で現れ、志願軍将兵の場合も例外ではなかった。新興里戦闘において前者にあたる部隊では、「敵が全線にわたって敗退したのを聞いて、さらに敵の死体が野原一面に倒れているのを見て、同時に勝利やその意味の宣伝を聞けば、気持ちが少しずつ好転した。そしてすでに戦闘を求め、われわれが実際に行く前に朝鮮は解放され、アメリカ軍はやはり弱くて国民党軍にすら及ばないと思うようになった。」しかし戦闘が順調ではなく、死傷が大きい部隊では、戦闘終結後において、勝利を信じなくなり「米中共倒れ」や「引き合わない戦争だ」、勝利の掛け声ばかり聞こえてくるが、捕虜の影もないのではないか」と語られる。意気消沈し、「飛行機や砲兵を出して共同作戦を行わなかったことや、準備の整わない戦争を始めたことを怨み、ひいては毛主席までを怨嗟の対象とした。⁽⁸²⁾」

将兵の間で挙がった飛行機参戦への期待と毛沢東批判の声は注目される。前者については、戦前の動員において軍側から聞かされたことに原因したように思われる。一三兵団の三八軍では事前動員において、将兵の敵機に対する恐怖心を解消するために、東北辺境軍で計画される四個の飛行連隊と三個の戦車旅団の設立を念頭に、志願軍も実戦において空中投下による補給があたかも事実のように語られたことから、入朝した後、後方向から来襲する米機のエンジンの音を聞けば「われわれの飛行機だ」と喜んだ兵士がいた。⁽⁸³⁾九兵団の八〇師団においても同じように、いわば願望や未来形を現在完了形として表現する事前動員があったように思われる。少なくとも多くの将兵には当初から飛行機の参戦に期待があったことが読み取れ、また新興里戦闘の終了後に、一部の幹部が「帰国して機械化

を装備し、次の「第三戦役では機械化部隊を出して戦う」と発言し、兵士もそれに期待を持ち続けたことは、同師団の報告書で確認できる。⁽⁸⁴⁾

毛沢東批判については、「みな不平不満を述べ、政治工作担当の幹部も制止しないばかりかそれに附和すらして上級機関の作戦指導を罵り、甚だしきは、毛主席をまで恨んで、*“人命よりも飛行機の価値が高い”*と付け加えた」という文言で同報告書に記されている。⁽⁸⁵⁾ 前述の「米中共倒れ」等の発言と併せて考えれば、同盟国だけの利益になる海外派兵の決定を下した毛沢東に対する批判が広く将兵の間で共有され、しかも自らの生命が最高権力者によって軽視されていることが政治将校を含めた将兵の間で意識されたことは読み取れる。

八〇師団の将兵が直面したのは、近代的装備を有する米軍の脅威にとどまらなかった。温暖な長江以南地域から北上して十分な防寒対策をとれないまま、氷点下二〇—三〇度の厳しい寒さにも晒された。準備が不十分な理由は、派兵決定から出動までの期間が短かったのみならず、第二陣の派兵部隊と位置づけられる「北京会議」の趣旨が部隊に伝達された後も、「多くの幹部はそれを信じず、一部の連隊幹部や後方支援担当の幹部もそれを信じず、十分な準備を行わなかった」からである。⁽⁸⁶⁾ たとえば、非戦闘減員予防の成功例として紹介された二四〇連隊第二中隊の場合は、臨江から出発した初日に部隊に凍傷現象が発生し、大量の減員が起きるのを防ぐべく「行軍しながら百余りの緋入の靴下と手袋を縫製した」という対策を中隊で講じたため戦闘開始に至るまで中隊全体の非戦闘減員を一名も出さなかったと言われる。⁽⁸⁷⁾ 成功例ですら事前防寒にこれほどの不備があつたことは露呈され、他は容易に類推される。事実、ある大隊の場合、「数多くの兵士が足部凍傷により落伍したが、そのことが気づかれても相応の手当が施されず、出発地の臨江から戦闘開始前まで一五〇名ほどの落伍者を出した」。⁽⁸⁸⁾

志願軍将兵が直面した困難の一つは、飢餓であつた。食料供給は、五十一年三月二五日付の志願軍後方支援部の刊

行した『中国人民志願軍一九五一年度陸軍供給標準』をみると、野戦軍兵士の一人一日当り米一・四キロが供給される。それに加えて毎月、手当費として師団長以下の将兵に共通して、「豚肉五〇〇グラム、石鹼三分の二個、齒ブラシ六分の一、本、齒磨き粉三分の二パック、米二キロ、白い布四方尺」が支給される。また煙草については、兵士葉煙草五〇〇グラム、中小隊長紙煙草五パック、大隊長と連隊長一〇パック、師団長一五パック、と定められた⁽⁸⁹⁾。しかし、それは多くの場合、紙上の規定に過ぎず、実態はその規定と全くかけ離れたものであったようである。輸送手段が乏しいなか、一般に兵士一人当たり七日分の保存食を各自に携行したが、その後の補給は難しかった。米軍第八騎兵連隊が五年二月六日に鹵獲したもう一通の、一三兵団三九軍政治部五〇年一〇月三十一日付のものと分類された通知では、現地政府と住民に対する食料借用について方法を詳細に定め、その理由として「現在、交通が不便で、輸送に困難があることに加えて、空爆の危険に晒され、そのなかで適時に食糧を部隊に補給することは保証し難い」事情が述べられている⁽⁹⁰⁾。この通知の日付からわかるように、第一陣の派兵部隊が鴨緑江をわたった直後から食糧難の問題に直面した。八〇師団の場合も例外ではなく、とくに新興里戦闘後に、食糧難がいつそう厳しく、現地で調達するしかなかった⁽⁹¹⁾。

食糧難は、長津湖の東南方面から迂回して、柳潭里と新興里で攻撃を受けた米軍の退路を断つべく下碇隅里とその周辺を攻撃して占拠する任務を担当した二〇軍の兵士、湖南省出身者と思われる劉国昌の日記からも確認される。五八師団砲兵連隊に所属した劉は、四九年一月一〇日に解放軍の捕虜となった元国民党軍兵士であり、三か月間の学習を経てそれまでの「罪を償う」意気込みで解放軍に参加した。五〇年一〇月一二日に汽車で上海方面から山東省兗州に着き、翌月二日に同砲兵連隊に編入された。朝鮮に出動すべく同五日に汽車で北上し、一〇日に輯安に着き、そこから鴨緑江を渡った。劉の日記によれば、一一月二日から南方出身者には通常、食べ慣れない「ジャガ

イモを食べ始めた。」その間、「橋を作り、道路を補修し、陣地を守り、担架を担ぎ、戦場の片付けを行った」が、食糧不足が深刻で、一ヶ月余り経過した「二月二七日に補給が充足し、正常な食事に戻った」とある。言い換えれば、長津湖戦闘が展開された期間を含めた二月末からの一ヶ月ほどは正常ではなかった。またここでの「正常」な食事とは同じく北方地域の粗食の「高粱米」であつたが、飢えよりは益しだったようである。

「高粱米」の補給を受けたと同時に、劉国昌は綿の帽子と靴も支給され、「これから飢えと寒さの脅威を受けなくなると思う」と記した。⁽⁹³⁾しかし、その後も、劉はその期待どおり飢餓を避けることができなかったようである。同じ五八師団一七三連隊のある老兵が、著者の取材に対して、後に三八度線以南に進撃した当時の状況を回想し、「何日も食べ物が無い日が続き、方々現地住民の家で採した結果、一つまみだけの米しか見つからなかった。それをお粥にして中隊長を含めて数人で分けて食べた。兵士一般には知らせなかった」と証言している。⁽⁹⁴⁾ある部隊の五年一月九日付の通知も、そのような状況を裏付けている。その通知によれば、部隊が三八度線を越えてから北部にいた頃のように現地政府からの支援が得られず、「住民に対して無理に食糧を調達することや、住民の不在に乗じてみだりに食物を物色するようなこと、食糧券を支払わずまたは少なめに払うような規律違反の事案が起きた」として、それを止めるよう厳命した。⁽⁹⁵⁾この通知は西部戦線を担当した五〇軍一五〇師団四五〇連隊のものと思われる。

その後、食糧難は徐々に改善されたとはいえ、全て解決されたとは言えない。五三年春以降、浙江省から入朝した二二軍六三師団一八九連隊第一大隊機銃中隊の陳金法の証言が、それを示している。「部隊は山の中に封じ込まれ、連続五、六日間食べ物がなく、命を繋ぐため、時には少量の馬の飼料で飢えを凌がざるを得なかった。甚だしい場合は、飲む水もなく、喉が乾いたら水分補給として山の洞窟の岸壁に染み出た水分を舐めるしかなかった。

このような状況のなかで、餓死はよくあることで、ある洞窟内にいた兵隊全員が餓え死にしたことも聞いた。ただ、敵の封鎖を破って食料が供給された時は、たまに牛肉の缶詰を丸ごと一つ食べ続けられたこともある」と語られた。⁽⁹⁶⁾ 制空権を持たないなか、輸送線が空爆によって寸断され、慢性的に食糧難に陥ったのである。

長津湖で劉が実感した寒さは、どのようなものであったか。劉の日記が欠落したため直接的には分からないが、戦闘から始まって、劉の防寒具が支給された数日前の十二月二四日まで続いた第二戦役の間、長津湖の前線で救護にあたったある部隊の衛生隊が収容しまたは病院に転送した傷病患者に関する統計から、その一端はうかがわれる。それによれば、第一隊から第五隊までそれぞれ、三五三人、二六〇二人、一〇〇四人、二三二人、一三〇四人の患者がいて、単純計算して衛生隊において何らかの処置を受けた傷病患者は延べ七五八五人に達した。各衛生隊相互間の転送による重複計上数を取り除けば、六四一人になるが、その内訳をみると、凍傷は半数に近く「四七・三%、三〇三二人」に達し、⁽⁹⁷⁾ 氷点下二〇〜三〇度という極寒の厳しさが伝わる数字である。第九兵团全体では、毛沢東が五〇年十二月一日に認めたように、「氣候が寒く、補給を欠いたことに加えて戦闘が激烈であったため、四万人もの減員に達した。」⁽⁹⁸⁾ 具体的には、「戦闘による死傷者一九二〇二人、寒さと飢餓による減員二八五四人（うち凍死一〇〇〇人、凍傷後、治療の効無く死亡した者三〇〇〇余人、減員総数は四八一五六人」、すなわち兵团の兵員総数の三二・一%に達したのである。⁽⁹⁹⁾ このような過酷な状況のなかで、前述した人たちが脱走したのであり、かれらは、個人の意思に基づき、いわば「単独講和」を実行したと言える。

3、二六軍

二七、二〇軍の後統部隊として位置づけられた二六軍は、一二月六日から、疲労困憊した前者の代わりに下碇隅里の東側から南下して咸興まで米軍を追撃し、また戦力の回復を図るべく前者が咸興、元山付近にとどまる間、五一年二月一七日から四月二一日にかけての第四戦役第二段階の戦闘に加わった。以下はその期間に発生した脱走事案である。

長津湖を含む咸鏡南道戦役に関する二六軍七七師団の問題將校の処分決定が、五一年三月一五日付で行われた。「勇敢な幹部は少なからずいた」という前置きにつづき、「個人主義的」で「抗美援朝の偉大な意義に対する十分な認識を欠き」、「右傾で命を惜しんで生を貪り、死を恐れた」幹部も少数ながらいたと批判した。そこに二二九、二二一と二三〇連隊の事案が挙げられた。

まず前者連隊の第一大隊の事案からみていく。同大隊第一中隊長の楊徳瑞は、処分決定書によれば「戦闘に消極的で適当に指揮し、作戦を工夫せずに困難ばかりを強調し、根強い右傾保守の思想を現した。水圀里戦闘の攻撃が始まった際に大隊の指揮官が戦死したため、連隊から大隊の指揮を代理して戦闘を継続するよう命令を受けたが、出来ない理由を強調して任務から逃れようとした。第三中隊が楊の近くにあったにもかかわらず、その作戦の指揮を工夫しなかったため、部隊に損害を招いた。第三小隊が二回も敵の戦車を発見して攻撃を仕掛けようと求めたにもかかわらず、楊は所在が発見されて自己の安全に悪影響を及ぼすことを恐れてそれを制止して戦機を失ったと非難された⁽¹⁰⁰⁾。

第二中隊長の李平書は、戦闘に消極的で命令を真剣に実行しなかったことで処分された。それによれば、水圀里

戦闘の際に、「萎縮して前進せず、敵の砲火の脅威を受けて指揮の位置から離脱し、全中隊の最後列に逃げて乱れた部隊を放置した。戦闘から撤退した後、敵情の監視に当たるべく第二中隊を水囲里に戻すよう命令を連隊から受けたが、無断で撤退した。しかも大安洞では一小隊を率いて山上の他部隊と連絡をとるとの大隊命令を受けた際、山上で防空措置がとれないとの理由でそれを実行せず、トーチカに隠れて丸一日動かなかった。」「その重大な規律違反を恥と思わず、逆に、俺が臨機応変に行動しなかったら、いのち三つあっても持たなかったろうな」と自慢した」として「行政上の過ちを記録する」との処分を受けた。⁽¹⁰⁾

第三中隊中隊長の陳義成は、「緊迫した状況のなか、水囲里戦闘から離脱し、萎縮して前進せず、指揮の位置から離れ、部隊を放置して、全中隊の最後部で安全な場所を見つけて隠れた。防空する度に、部隊から二、三キロほど離れ、幹部としての役割と責任を果たさず、しかも防空時には各自に行動しお互いに構うなど語った。部隊の行動が大きく遅延した時、何ら方策を講じないばかりでなく、このような状況のなかで食べるものも飲むものもなく、落伍してもしかたがないと語った。強い右傾の思想の影響で、継続して戦闘することを嫌い、独断で落伍して後方に向けて逃走した」と処分決定書に記される。⁽¹⁰²⁾

同第三中隊副中隊長の斉金発も、「指揮を工夫せず、戦闘に萎縮して前進せず、命令を執行せず、勝手に行動し、無断で戦闘から離脱した」とのことと処分された。斉は水囲里戦闘の際に、第三小隊の指揮を担当したが、戦闘開始後、同小隊長が戦死して部隊を指揮する者がいない状況も知らないまま、工事の中にとどまって動かなかった。大安洞では、一個小隊を率いて山上の警戒と偵察に当たると大隊から命令されたが、部隊を派出するにとどめてそれ以外は一切構わず、同小隊が一日中食事をとれない事態を招いた。二回目の高龍攻撃を準備する動員にあたり、足部の凍傷を理由にトーチカに隠れて行かず、無断で後方に休養を取りに行った。斉は「行政上の過ちを記録す

る」⁽¹⁰³⁾との処分を受けた。

第二大隊機銃砲中隊の中隊長、陳福財も、「右傾保守的な思想が根強く」、「命令を執行しなかった」ことで「行政上の大きな過ちを記録する」と処分された。水圀里戦闘の際に、部隊が突撃を始めたにもかかわらず、火力をもつてその援護の指揮に自ら当たらず、指揮の位置から離れて場所を探して隠れた。大隊部から何度も連絡を試みられたが、所在が見つからなかった。砲小队と連絡を図るべく後方に行ったというのが、その弁明であった。自ら一小隊を率いて第一大隊の攻撃を援護するよう命令されたにもかかわらず、本人が行かなかった。⁽¹⁰⁴⁾

第三大隊では、医者劉浩は「右傾保守の思想が根強く、命令を執行せずに戦闘から離脱して個人を保存する」との理由で処分された。処分決定書によれば、劉は下碇隅里戦闘の際に衛生所の全所員を率いて落伍した。また大安洞では、任務実行の準備に当たって、全所員が大隊指揮所の傍にある防空壕にあり、大隊長が三度も通信員を差し向かわせても壕の外に出るようとの命令に従わず、副大隊長が直接に行つて命令しても聞かず、その後にもまた通信兵から命令を伝達されても執行しなかった。翌日に至つて命令伝達者に促されてようやく動き出した。そのため、「負傷者の不必要な苦痛と流血を招いた」とされた。⁽¹⁰⁵⁾

次に第二三連隊関係者の事案をみてみる。第七中隊の政治指導員、羅万金は、処分決定書によれば、「生を貪り死を恐れてその頂点に達し」、二回にわたつて陣地を離脱した。一月二十九日に部隊は一三五〇高地での任務を実行し、山上で敵軍と接触したが、羅は一個分隊を率いて引き返した。大隊の政治教導員からの質問に対し、「山上に敵がいなくなつた」と応えた。翌晩に同じ任務に当たつたが、部隊が突撃することになる出発予定地点にまだ到達していない時点で、またもや一個分隊を率いて逃げ帰つてきた。連隊の政治委員からの質問に対し、「大隊から帰還の命令があつたから」と称した。羅は免職と処分された。⁽¹⁰⁶⁾

第七中隊中隊長の陳柱も免職処分を受けた。決定書によれば、陳は戦闘に消極的で、真剣に命令を執行せずに姑息な対応を行い、戦機を逸した。一三五〇高地の攻略にあたり、同中隊が正面攻撃の任務を与えられ、陳は一個分隊を率いて敵に接近したにもかかわらず、発砲せず、また後続部隊との連絡もとらなかった。夜明けになって人員不足を理由に闘わずに引き返した。同様の任務を命じられた翌晩は、足部の凍傷を理由に行かなかった。深刻な飢えと寒さにあった部隊の状況に関心を払わず、その潰散を招いたと糾弾された。⁽¹⁰⁷⁾

さらに第二三〇連隊の事案である。第五中隊副政治指導員の張召雲は、処分決定書によれば、「右傾保守の思想が根強く、故意に落伍して戦闘から離脱した。」入朝以来、「服務態度が消極的で、部隊のことに関心をもたず」、自ら寝る場所を探し、落伍した兵士を收容する際、忍耐強さを見せずに叱責した。ある戦役においては、数回も落伍して戦闘に加わらなかった。防空するにあたり、部隊から遠く離れ、一日中に連絡がとれないこともあった。高龍で敵を迫撃する際に第三小隊を率いて山上に登る任務を担当したが、「登った部隊の後ろで無意味に物を拾い、部隊から離脱した。」高成庄における狙撃戦においては、山上で第一小隊の指揮を担当したところ、敵機からの猛烈な爆撃を受け、「下山して缶詰を炊くとの理由を設けて去って戻らなかった。」張は「行政上の降格処分」を受けた。⁽¹⁰⁸⁾

以上は第七七師団長名で下された処分決定であったが、二三〇連隊では、それに先立って、一月二九日付で連隊党紀律委員会名で五名の脱走下級将校と兵士に関する処分決定が行われていた。その一つは、同連隊第二大隊機銃中隊の小隊長、陳興勝の事案である。陳は、安徽省靈璧県出身で、四七年一月に国民政府軍から帰順して入隊し、同年六月に入党した。兵士から正副分隊長、小隊長等の職を歴任し、党内においては基礎組織である「小組」の長を務めた。処分決定書によれば、陳は「入朝以来、服務態度が消極的で、意欲が低い。とくに厳しい昼間の防空や

夜間行軍等のような疲労困憊の状況下においては不平不満が多く、部下に働きかけてその精神を安定させるようなことを行わなかった。戦場に近づき京下里戦闘を準備する際に、敵機が多いのをみて命を惜しむようになり、ここで死んでも意味がないと思ったことから、自ら小隊を引率して故意に部隊本体から落伍した。」上官からの連絡を受けた後も、前進せずに小隊を率いて逆の方向に向い、「二三〇連隊ではなく独立大隊の者と詐称した。」その間、敗北主義の言論を撒き散らし、部下の掌握を怠り、任務の遂行に悪い影響を与えたのみならず、小隊の戦友をも敵機によって負傷させた結果となった。そのことから、「党内における公開警告処分」とされた。⁽¹⁰⁹⁾

陳に次いだ二つ目の事案は、同連隊一大隊三中隊機銃分隊長、何崇に関するものであった。何は、四川省達県出身で、四七年四月に帰順して入隊し、四九年二月に入党した。兵卒から正副班長の職を歴任した。同人は「政治における向上心が弱く、墮落腐敗思想が強まった」と処分で断罪された。その表れとして挙げられたのは、「家族思いの気持ちが強すぎて、戦闘を恐れた」ことであつた。より具体的には、「部隊が抗米援朝のため北上した際、帰郷すべく途中の山東省滕県の界河駅で銃を携行して脱走した。後に二六軍の後方支援部門の捜索によって身柄が確保され、原隊に送還された。」帰隊後、「教育を聞き入れて改悛する態度を見せた」ため、処分は党籍剥奪より軽い「党内観察」にとどまった。⁽¹¹⁰⁾ 何が出国前に脱走を試みたことは注目に値する。

同処分決定書には陳と何の外、連隊特務中隊の孟瑰懷副小隊長と王作蘭分隊長の脱走事案も含まれる。孟は山東省沂北県出身で、日中戦争中の四五年三月に「自ら入隊し」、翌年八月に入党した。兵士から、正副分隊長を経て副小隊長を務めた。党内には「小組」長および支部委員を務めた。王も同じく山東省蒙山県出身で、孟に近い経歴をもつ。日中戦争終結時の四五年八月に「自ら入隊し」、翌年九月に入党した。兵士から正副分隊長を務め、党内には「小組」長と支部委員を務めた。処分決定書によれば、この二名は、入朝以来「苦難に耐えられず、死を恐れ

て苦を恐れた。とくに京下里における戦闘以降、戦争の残酷さを認識し、命を惜しむ思想が一層ひどくなり、軍務に消極的で意欲が低下した。特務中隊が第三大隊と合併し戦闘任務の準備に入った段階で伍をなして脱走した。」⁽¹¹⁾二名とも党から除名された。当時、大量の死傷によって戦闘力を失った部隊を統廃合する臨時再編が行われ、この特務中隊と第三大隊の合併も、そうしたなかで取られた措置の一つと思われる、孟と王の脱走時の戦場の苛烈さがかがわせる一語である。

これまでみてきた脱走に関する処分決定は、ほとんど例外なく対象者を「右傾保守」で「命を惜しんだ」として糾弾しているが、自殺が試みられた案件の場合は、そのような説明では論理的に成り立たないはずである。にもかかわらず、次に見る二三〇連隊第一大隊機銃中隊の兵士、曹洪友に対する処分の文面は、相変わらず「命を惜しむ」との表現が使われている。前述の陳、何、孟、王に並んで処分された曹は山東省費県出身で、四三年一〇月に入隊し、同月に入党した。入隊後、正副の分隊長、小隊長、党内の「小組」長および支部委員を歴任した。処分書によれば、五〇年四月にすでに服務意欲がなく上官に反抗するとの理由で免職され、党内警告処分を受けた。「朝鮮に入ってから、服務態度が消極的で意欲が低く、苦難の状況と敵機の脅威を受けて、命を惜しむ気持ちがいっそう強くなり、指揮に従わず、上官をみだりに罵って恨み言を並べた。一貫して尊大な態度をもち、働く意欲が低かった。協調性がなく、シャベルで小組長を三回ほど殴打したことがあった。行軍時に仮病を使い、二〇軍のモーゼル拳銃を奪って戦闘からの離脱を試みた。諭されても聞き入れず、上官に抵抗すべく、コートを頭に被せて溝渠に転がり落ちる方法で自殺を図ろうと試みた。」曹は党から除名処分を受けた。⁽¹²⁾

あるいは曹の自殺は本気ではなかったと認識されたかもしれない。二三〇連隊の兵士、鄒煥貴に対して下された七七師団「政治部軍法裁判決書」では、「命を惜しむ」という「罪名」に内包する矛盾が意識されたようで、勇敢

でないことを含意する「右傾的思想」という言葉を残しながら、「命を惜しむ」の代わりに「革命に対する変節」という「罪名」が使われた。二六歳の鄒は四川省安県の貧農家庭の生まれで、四四年に国民政府軍に入隊し、四八年に淮海戦役で帰順した。上海戦役の際に一時、国民政府軍への復帰を試みたが、「露見して捕まり、教育を受けた後入隊した。」処分決定書によれば、鄒は「政治上、落後して教え諭されても聞き入れず、前回の戦役の際に戦闘に加わらないように落伍した。今回のわが二六軍が光荣かつ困難な狙撃の任務を受けてから、右傾的思想が一層強くなり、……困苦に耐えられず、二月一五日に工事中に自殺をもって革命から変節しようとした。」鄒は自殺未遂で自傷となり、懲役一年と言い渡された。⁽¹¹³⁾

自殺した張忠秀の事案では、処分決定書に「右傾保守」や「命を惜しむ」との表現が消え、代わりに「個人主義的」と批判された。二三〇連隊のものと思われるその決定書によれば、第二大隊第四中隊第六分隊の副分隊長を務めた三一歳の張は、山東省沂源县のある中農家庭出身で、四六年一二月にみずから入隊し、兵士を経て副分隊長に昇任した。四八年一二月に入党し、党内の「小組」の長を務めたことがあった。「長い間享樂を好み、地位に拘る傾向がある」と処分決定で言われたが、その処分事由をみれば、「お正月からまだ何日も経っていないのに、また行軍か。歩き出すと十数日間になろう。自分は四九年にすでに副分隊長になったが、この連隊に移った後も、相変わらず副分隊長のまま。自分には郷里で待っていてくれる許婚がいる」と語り、「家族からの手紙を受け取った度ごとに情緒に安定を欠くようになり、服務に怠慢が見られた」ということが挙げられた。「長期にわたって教育を受けてきたが、問題を充分に重視して注意を聞き入れることはしなかった。」旧正月から一〇日経た二月一六日の明け方、他の代理で歩哨に立っていた張は、炊事班に立ち寄って「やっと交替の時間になった。これで老兵は救われる」と炊事班長に語った切り出て行った。その足で分隊が入居した家屋の東方角一〇メートル離れた場所にあ

る曲がった樹木の下に行き、「落下傘の紐を使って自ら縊死した」⁽¹¹⁴⁾

郷里の許婚を含む家族のことを案じながら立った深夜の歩哨から帰ってきて、厳寒で凍えた体を炊事班の火で暖をとろうとしたが、空襲を防ぐため「昼は煙を禁じ、夜は火を禁じる」⁽¹¹⁵⁾との規定で示されるように一切の炊事は未明までに終わらされたため、張が立ち寄った時点ではすでに余燼すら窯に残っていなかったのか、それとも用意されていた一日分の少量かつ粗末な食べ物をみて来る日も来る日も続いていた過酷な状態から将来への希望を全く感じなくなったのかは、知る由もない。ただ、戦友の代わり未明まで歩哨に立っていたことから、自死せざるをえないほど強度な業務が強いられた中間管理職の悲哀と、最期を歩哨終了後に選んだことから、そのつよい責任感はあるかがわれる。

終りに

最後に、海外派兵される志願兵らにとって、鴨緑江を渡ることは何を意味したのかという問題について考えてみる。一三兵团司令部政治部主任の杜平が、五〇年一〇月二三日夕方に安東市から鴨緑江の北岸に沿って長甸河口まで北上し、そこから川を渡ったが、迎え撃つ米軍をかつての日本軍に重ね合わせて、「一九〇四年、日本軍は新義州から鴨緑江を渡ってこの道に沿って遼陽に迫り、わが東北地域を分割すべくロシア軍と戦争を行った」と回想録に記した⁽¹¹⁶⁾。歴史上、この国境線にある川を越えて数多の軍隊が往来し、一六世紀九〇年代に明王朝が豊臣秀吉の朝鮮出兵に対抗すべく派遣した援軍もこの川を渡った。近代だけでも一八九四年勃発した日清戦争の際に山縣有朋の指揮した第一軍は義州から安平河口を渡江し、一九三一年九月に満州事変を起こした関東軍に策応すべく朝鮮軍

は越境した。

成功例で自己を鼓舞するなら明の事例を挙げればよかった。また、敵愾心を強調するには日清戦争の事例が適当かもしれない。しかも山縣第一軍の佐藤支隊が渡江したのは一〇月二四日⁽¹¹⁷⁾で杜の二三日とはわずか一日の差であった。明、清のいずれも一九〇八年生まれの杜平にとつては遠すぎたということであれば、杜の二三才の頃に起きた朝鮮軍の事例はその意識上に最も近かつたはずである。しかし杜が歴史の地層から掘り起こした事例は、そのいずれでもない日露戦争に関係する一齣であった。このことから、鴨緑江に関する杜の歴史認識は、その回想録が執筆された一九八〇年代中旬に至るまで、無意識のうちにソ連の影響を強く受けていたと観測されるが、ここでは何よりも杜らが派兵される際に使用した地図等の作戦資料の一部はソ連側によつて提供された可能性が高いことだけを指摘するに止めたい。

渡江の際、将兵は各々の形で特別な思いを表現した。六五軍一九四師団の隷下にあつた五八〇連隊長の武宏が、五一年二月一九日に同連隊を率いて本溪南駅から汽車に乗り、安東で二日間ほど休憩した後、徒歩で川に沿つて九連城まで行軍し、凍つた川面を渡つた。「空が暗く、時計をみると、時刻は五一年二月二四日の夜七時であつた」⁽¹¹⁸⁾。渡江の時刻を意識した将兵は武宏だけではなかつた。ある部隊の報務員を務めた姚啓明もその一人であり、その前を歩いていた女性戦友、蔣志娟に時刻を尋ねた。すでに時計をみた蔣は「見るまでもなく、一八時三〇分だ」と答えた。貴重品であつた時計を着用していなかつた多くの兵士は、みずからの歩数で測り、「中国から朝鮮までの距離は一五〇〇歩しかない」と語つた。⁽¹¹⁹⁾

鴨緑江について、第一九兵团司令官の楊得志は、出勤前の集結地であつた山東省兗州で、東北地域に出稼ぎの多かつた現地に住民から、「鴨緑江は長江ほど川幅が広くなく、水流も長江ほど速くない」と聞いた。⁽¹²⁰⁾ 第三兵团一二

軍三四師団一〇〇連隊の李俊の五一年の日記によれば、川を渡った直後の四月二一日に行われた総括会において、「口火を切った李一徳が、上司から鴨緑江を渡る命令を受け、特に違和感を持たなかった。渡る際、振り返らなかった。大したことはなかったと心中、思った」と発言した。史光華も「鴨緑江は長江ほど川幅が広くなく、中朝関係もそれに比することができると語った⁽¹²⁾。兗州市民の表現はかれらの平時の距離感覚を反映したものであり、楊もそれを軍事作戦上の「客観的な」視点で捉えたであろう。李と史の発言には、「総括会」で行われたことから、どこか「よそ行き」の響きがある。少なくとも、本文でみてきた脱走将兵、とりわけ出動前に脱走を試みたものの捕らえられて原隊に送還された何崇のような兵士がどのような気持ちで川を渡ったのかという設問の答えは、それらの表現からは汲み取れない。

この海外派兵で川をわたれば永遠に帰って来られないであろうと考えた将兵は多かった。志願軍司令官の彭徳懷自身も生還できない可能性が高いとみて、正式に派兵が決まった一〇月五日の夜中を過ぎた六日の一時頃、秘書の張養吾に「夜が明けたら甥と姪が通っている学校に電話し、ここ一兩日に遊びに来てもらう手筈を整えるよう」指示した。⁽¹³⁾この別れの後、いつまた会えるかは測りがたいと意識したためであった。

志願軍将兵は北朝鮮軍の服を着用して、氏名と本籍地はもちろんのこと、中国と関連する全ての痕跡を所持品から消去しなければならず、入朝後、可能な限り会話も慎むよう命令を受けていた。鴨緑江を渡る際の将兵の行動について、当時一五軍二九師団所属の鄭時文は、興味深い逸話を書き残した。五一年三月二五日夕方、同師団八七連隊と行動をとにした傅巖森副師団長が、部隊の渡江の様子を視察したところ、川に向かって大声で、「傅巖森と言います。四川省生まれです。子供のころ牛飼いをし、三二年に紅軍に参加し……」と叫んだ。部下に対しても、渡江する前に言いたいことを一言、言い残すよう指示した。それを受けて師団の軍務課長は、「張彦文と言います。

河北省武安県出身です……」と叫んだ。それに続き、「侯英傑と言います。軍旗手です……。」「おつ母あー。もう年だから、働きすぎないように。柴刈りと田植えは嫁にやらせて……。」「母ちゃんー。会いたいよ……。」というように、さまざまな叫び声が静謐な川面に響き渡った。全国各地の方言訛りの言葉に加えて、それぞれの民謡や戯曲のメロディーも加わった。日中戦争時に入隊した馬飼いの魏某は、「これまで氏名のある人間だったが、明日からは名もなき霊になってしまうかもしれないから」と鄭に解説した。⁽¹²⁴⁾ 海外に派兵された将兵が国境線の内側に残して行つたせめての「遺言」であつた。

- (1) 軍事科学院軍事歴史研究所『抗美援朝戦争史（修訂版）』（下巻）（軍事科学出版社、二〇一一年）六一〇頁。
- (2) 杜平『杜平回憶録』（解放軍出版社、二〇〇八年）一五頁。
- (3) 『建国以来毛沢東軍事文稿』下巻（軍事科学出版社・中央文献出版社、二〇〇九年）三七二―三七三頁。
- (4) 『杜平回憶録』前掲、一五頁。
- (5) 鄧小平『鄧小平軍事文集』第二巻（軍事科学出版社・中央文献出版社、二〇〇四年）一二六頁。
- (6) 周恩来『周恩来選集』上巻（人民出版社、一九八〇年）三一五、三四六―三四七頁。江林平「解放戦士」群体的產生及其規模『党的文献』（二〇一二年第三期）。
- (7) 金冲及編『周恩来伝』第三巻（中央文献出版社、一九九八年）九七九頁。
- (8) 『西南区情况』『内部参考』一九五〇年八月二八日。
- (9) 崑崙『父親杜平』（上海文芸出版社、二〇〇八年）九一―九二頁。
- (10) 鄭洞国（鄭建邦・胡耀萍整理）『我的戎馬生涯——鄭洞国回憶録』（團結出版社、一九九二年）四九二頁。
- (11) 한림대학교 아시아문화연구소 편『한국전쟁기 중공군문서』（以下『중공군문서』と略す）제2권（한림대학교 1996년）69쪽。
- (12) 『중공군문서』제3권、332쪽。
- (13) 同右、333쪽。

- (14) 同右。
- (15) 青年軍史編輯小組『青年軍史』（青年軍聯誼總會，一九八六年）九九—二五八頁。
- (16) 『建国以来毛沢東軍事文稿』上卷、前掲、一三八頁。
- (17) 楊迪『在志願軍司令部的歲月里——鮮為人知的真情實況』（解放軍出版社，一九九八年）七頁。
- (18) 王穎『洛杉磯託児所』（解放軍出版社，一九九六年）一七一—一八頁。郭靜・周清香主編『洛杉磯託児所——延安紀事』（中国福利会出版社，二〇〇五年）七八—七九頁。
- (19) 江擁輝『三八軍在朝鮮』（遼寧人民出版社，一九八九年）二一—四頁。
- (20) 黃道炫『二八五 团下的心靈史——戰時中共的婚恋管控』（中国社会科学院近代史研究所）二〇一九年第一期。
- (21) 江擁輝『三八軍在朝鮮』、前掲、二一—四頁。
- (22) 『중공군문서』제4권, 141, 145쪽。
- (23) 『陝西軍区及十九兵团復員工作中的幾個問題』（『内部參考』一九五〇年九月三〇日）『陝西軍区及十九兵团復員工作的初步情況』（『内部參考』一九五〇年一〇月二七日）。
- (24) 『山東復員工作情况』（『内部參考』一九五〇年一〇月二六日）。
- (25) 『陝西軍区及十九兵团復員工作中的幾個問題』、前掲。
- (26) 同右。
- (27) 齊小林『当兵』（四川人民出版社，二〇一五年），一九〇頁。齊のこの研究は豊富な一次史料に基づき、華北地域に兵役をめぐって農家と共產党政権の間で存在した緊張関係について考察した労作である。
- (28) 『太行区九年來參軍的經過情況及其主要經驗』（山西省檔案館編『太行党史資料彙編』第七卷（山西人民出版社，二〇〇〇年）七九二頁。
- (29) 孫麗英『晋察冀志願義務兵役制度述論』（『抗日戰爭研究』二〇〇五年，第三期）。
- (30) 齊小林『当兵』、前掲、一八九頁。
- (31) 中国人民解放军政治学院政治工作教研室編『軍隊政治工作歷史資料』第二二冊（一九八二年）一五九頁。
- (32) 『華北局關於巩固部隊克服逃亡及請假現象的指示』（一九四九年三月）D二一〇—六七五—三、上海市檔案館藏。
- (33) 毛沢東文獻資料研究会『毛沢東集』第二版第一〇卷（蒼蒼社，一九八三年）一九九—二〇九頁。
- (34) 『陝西軍区及十九兵团復員工作中的幾個問題』、前掲、一九五〇年九月三〇日。

- (35) 「中華人民共和国婚姻法」『人民日報』一九五〇年五月一日。
- (36) 「山東復員工作中的幾個問題」『內部參考』一九五〇年一〇月一日。
- (37) 「遼西婦女誤解婚姻法影響生產部隊家屬改嫁引起情緒波動」『內部參考』一九五〇年六月二日。
- (38) 「陝西軍区及十九兵团復員工作的初步情況」、前掲。
- (39) 江擁輝『三八軍在朝鮮』、前掲、四一七頁。
- (40) 「陝西軍区及十九兵团復員工作的初步情況」、前掲。
- (41) 「華東軍区和第三野戰軍整編復員工作中的若干偏向」『內部參考』一九五〇年八月一八日。
- (42) 同右。『鄧小平軍事文集』第二卷（軍事科學出版社・中央文獻出版社、二〇〇四年）一二三頁。
- (43) 「華東軍区和第三野戰軍整編復員工作中的若干偏向」、前掲。
- (44) 同右。
- (45) 「陝西軍区及十九兵团復員工作中的幾個問題」、前掲。
- (46) 「中華人民共和国土地改革法」『人民日報』一九五〇年六月三〇日。
- (47) 「山東復員工作中的幾個問題」、前掲。
- (48) 金沖及『周恩來傳』第三卷、前掲、九七九頁。
- (49) 『중공군문서』제4권、101卒。
- (50) 同右、53—57卒。
- (51) 同右、95—96卒。
- (52) 同右、47—48卒。
- (53) 同右、378卒。
- (54) 上海市檔案館所藏。
- (55) 「山東復員工作中的幾個問題」、前掲。日中戰爭終結前後に大量の対日協力軍が国共両軍に編入された。張正隆『雪白血紅』（香港・大地出版社、一九九一年）や劉熙明『偽軍 強權競逐下の卒子（一九三七—一九四九）』（台北・稻香出版社、二〇一一年）を参照されたい。なお、一三兵团三八軍一一四師团三四〇連隊第二大隊第五中隊は、一九四五年六月に山東省諸城の対日協力軍の一小隊を元に誕生した部隊である。翟仲禹・李人毅『雄師苦旅』（解放軍出版社、二〇〇二年）二八〇頁。
- (56) 江擁輝『三十八軍在朝鮮』、前掲、一五一—一七頁。

- (57) 朱德成主編『湖北近代監獄』(湖北省勞改工作管理局勞働史志編輯室、一九八七年 九—一〇、四五、二五一、二五六—二五七頁。
- (58) 「中南地区國家銀行の幹部問題」『内部参考』一九五〇年八月一六日。
- (59) 「京、津、滬、漢部分群衆對目前時局的反映」『内部参考』一九五〇年二月三日。
- (60) 「漢口、大冶各階層對時局的反映」『内部参考』一九五〇年二月一九日。
- (61) 「無錫、蘇州等地流傳的謠言及部分幹部群衆對時局的反映」『内部参考』一九五〇年二月二日。
- (62) 「抗美援朝保家衛國聲中察省各界思想動態」『内部参考』一九五〇年二月二〇日。
- (63) 「抗美援朝聲中迪化機關部隊幹部思想動態」『内部参考』一九五〇年二月二日。
- (64) 「漢口、大冶各階層對時局的反映」、前掲。
- (65) 「京、津、滬、漢部分群衆對目前時局的反映」、前掲。
- (66) 「抗美援朝保家衛國聲中察省各界思想動態」、前掲。
- (67) 「抗美援朝聲中迪化機關部隊幹部思想動態」、前掲。
- (68) 『중공군문서』제3권、257쪽。
- (69) 同右、296—297쪽。
- (70) 同右、301쪽。
- (71) 同右、492쪽。
- (72) 同右、298쪽。
- (73) 同右、300쪽。
- (74) 同右、303쪽。
- (75) 同右、299쪽。
- (76) 同右、302쪽。
- (77) 『중공군문서』제2권、102쪽。
- (78) 同右、102—103쪽。
- (79) 同右、130쪽。
- (80) 同右、101쪽。
- (81) 同右、101쪽。

- (82) 同右、102쪽。
 (83) 江擁輝、前掲、二八、二九、三九、四〇頁。
 (84) 『중공군문서』 제2권、102、105쪽。
 (85) 同右、92쪽。
 (86) 同右、103쪽。
 (87) 同右、127쪽。
 (88) 同右、91쪽。
 (89) 『중공군문서』 제3권、437、446쪽。
 (90) 同右、391쪽。
 (91) 『중공군문서』 제2권、108쪽。
 (92) 同右、제4권、249—251쪽。
 (93) 同右。
 (94) 二〇軍のY・H氏は、三一年生まれ、中学校卒業までの教育を受けたため、中隊の文化教員を務めた。陳は二〇一七年と一八年に、計三回ほど同氏を取材した。
 (95) 『중공군문서』 제3권、2쪽。
 (96) 陳金法口述「吃一顆糖就要消滅一個敵人」張大華主編『我在朝鮮戰場』（新華出版社、二〇一三年）一〇—一二頁。
 (97) 『중공군문서』 제3권、345—346쪽。
 (98) 『建国以来毛沢東軍事文稿』上卷、前掲、四一〇頁。
 (99) 双石『開国第一戦』上卷（中共党史出版社、二〇〇六年）一八九頁。
 (100) 『중공군문서』 제3권、55쪽。
 (101) 同右。
 (102) 同右。
 (103) 同右。
 (104) 同右。
 (105) 同右。
 (106) 同右。

- 107 同右。
 108 同右。
 109 同右、292—294卒。
 110 同右。
 111 同右。
 112 同右。
 113 同右、256卒。
 114 同右、295卒。
 115 同右、62卒。
 116 『杜平回憶錄』、前掲、三二頁。
 117 參謀本部編纂『明治二十七八年日清戰史』第二卷（東京印刷、一九〇四年）二九七—三〇二頁。
 118 沈志華主編『俄羅斯解密檔案選編 中蘇關係 第三卷』（中國出版集團、二〇一五年）一二六—一二七頁。
 119 武宏『軍旅生涯 武宏回憶錄』（中國文史出版社、二〇〇七年）一七一頁。
 120 田芸編『朝鮮戰場親歷記』（長江文芸出版社、二〇一一年）七—八頁。
 121 楊得志『楊得志回憶錄』（解放軍出版社、二〇一一年）四一—四頁。
 122 『중공군문서』 제4권、278—279卒。
 123 張希「彭德懷受命率師抗美援朝的前前後後」『中共黨史資料』三一号、一九八九年、一三九頁。
 124 鄭時文『我心有歌』（世界知識出版社、二〇〇七年）五六—五七頁。